

の入り口にて

ゲヘナの入り口にて

悪霊に関する正教の教え  
およびそれらに対する神の裁きについて

アレクサンドル（ミレアント）主教

目次:

---

|                           |    |
|---------------------------|----|
| はじめに .....                | 3  |
| 聖書 悪霊について .....           | 5  |
| 悪霊憑き および憑依 .....          | 14 |
| 悪しき者の罫 .....              | 21 |
| オカルト主義の誘惑 .....           | 29 |
| 悪霊からの防護策 。 .....          | 52 |
| サタンの王国 燃えるゲヘナの入り口にて ..... | 60 |
| 結論 .....                  | 63 |
| 悪霊の中傷に対する祈り .....         | 64 |
| エクソシストへの警告 .....          | 69 |
| エクソシズムに関する記事の脚注。 .....    | 74 |

---

## はじめに

「わたしは、あなたと女との間に、また、あなたの子孫と彼女の子孫との間に敵意を置く。その子はあなたの頭を砕き、あなたはそのかかとを噛むであろう」（創世記3:15）。

物質的な利益や肉体的な感覚のみに生きている人は、神の存在、善悪の霊が存在する霊界、死後の世界といった「抽象的な」問題について深く考えることはない。その人は日々の心配事に完全に飲み込まれている。しかし、突如として予期せぬ衝撃が彼を揺さぶると、彼は自分の人生の意味を深く考え、存在の目的を見出したいという欲求を抱き始める。そして、人生の精神的・道徳的な側面について考え始めると、彼はすぐに、これまでこれほどまでに信じてきた科学が、自分にとって最も切実で切迫した疑問を解き明かすことにおいて、まったく無力であることに気づく。

もしその人の内に宗教的な感覚が完全に失われていなければ、彼は神に立ち返る必要性を感じ、祈りを捧げ、聖書を読み始めるだろう。そして、それが単なる一過性で表面的な逸脱ではなく、真に深刻な人生の転機であり、より良くなりたいという誠実な願いであるならば、神は彼の心を新たにし、内なる視界に新たな地平を開き始めるだろう。人は、主の導く御手、主の近さ、そして父なる神の愛をはっきりと感じ始める。その人は、世界が以前思っていたよりもはるかに広く、内容も豊かであることを理解し始めるでしょう。善と悪をより鋭敏に見分けるようになり、霊的な世界や、自分の人生に影響を与える目に見えない存在——あるものは善の方向へ、あるものは悪の方向へと導く——が存在すること、そして神のほかに天使や悪魔が存在することを自覚し始めるでしょう。

霊的な世界について学ぶことは興味深く、また重要です。しかし、その知識はどこから得ればよいのでしょうか。このテーマに関する文献は極めて膨大で、矛盾に満ち、作り話やあらゆる空想で溢れています。しかし、聖書がこのテーマについて教えることは、簡潔ながらも非常に明確かつ正確です。聖書は、光に満ちた善良な天使たちが存在し、すべてのクリスチャンにはそれぞれの守護天使がいて教えています。天使については、別の小冊子が用意されています（宣教リーフレット第14号「天使」を参照）。

天使のほかに、悪魔も存在します。聖書と人生経験は、彼らが実際に存在し、すべての人にとって、見せかけではなく、現実的かつ恒常的な危険をもたらしていることを確信させてくれます。人間社会において、正常で善意のある人々と並んで、あらゆる種類の犯罪者、墮落者、サイコパス、サディストなどが存在するように、霊界においても、光に満ちた善良な天使たちのほかに、霊界の「クズ」——悪魔や悪霊——が存在します。私たちの世界において、誰も生まれながらにして犯罪者やサディスト、好色家として生まれるわけではなく、無秩序で罪深い行いの結果としてそうになってしまうのと同様に、その目に見えない世界においても、すべての存在は当初は善良で善意に満ちていたが、その後、そのうちのいくつかが邪悪な道を選び、墮落して意識的に邪悪な存在となってしまったのである。犯罪的な行為の結果、彼らの天使的な知性は曇り、彼らは邪悪で、衝動的かつ無秩序なものとなった。彼らは他者に苦痛を与え、あらゆる悪を撒き散らすことに喜びを見出している。

この小冊子では、墮天使に関する正教会の教えを読者に紹介し、彼らがどのような目的を追求しているのか、人々を誘惑し悪を撒き散らす手口について解説するとともに、彼らの策略から身を守る方法についても説明します。また、現代社会においてますます広範囲に及んでいるオカルティズム

と悪魔主義というテーマに、特別な章を割いています。現代の「黒魔術的靈性」の台頭を憂慮して見ていると、聖書の次の預言が思い起こされます。「*地と海に住む者たちよ、災いだ。悪魔が、自分の残された時間がわずかであることを知って、激しい怒りを抱いて、あなたがたのところに降りてきたからである*」（黙示録12:12）。しかし、慰めとなるのは、闇の君主のその成功こそが、主イエス・キリストが天使や聖徒たちに囲まれて再び地上に来られる時、彼の完全な敗北と懲罰が間近であることを告げているということだ。その時、「*悪魔は火と硫黄の池に投げ込まれ.....そこで昼も夜も、世々限りなく苦しめられる.....天よ、これを喜びなさい。神は彼に対して裁きを成し遂げられたからだ!*」（黙示録18:20、20:2-10）。冥界のすべての勢力が打ち負かされた後、存在の新たな段階が訪れ、誘惑する霊の誘惑に打ち勝った義人たちは、彼らの父の御国において、太陽のように輝き出すでしょう。

## 聖書 悪霊について

聖書は、目に見える物質世界以外にも、広大で多様な霊的世界が存在することを教えている。この世界は私たちの世界とはあまりにも異なり、またそれよりも豊かであるため、私たちはそれを完全に理解することも、満足のいく形で想像することさえできない。それにもかかわらず、本質的な違いがあるにもかかわらず、霊的世界と物質世界はある程度互いに接している。霊的世界は、二つの異なる、さらには対立する存在の領域に分かれています。その一つは「天」と呼ばれ、神が至福の霊たちに御自身の栄光を現される光の王国です。そこには天使たちと義人の魂が住んでいます。もう一つの領域は「地獄」であり、闇の王国であり、悪魔や罪人の魂が苦しむ場所です。悪魔は、天使と同様、

独自の存在ではありません。彼らは不死ですが、永遠ではありません——ただ神のみが永遠なのです。私たちの物質世界が創造されるはるか以前、神は霊的世界を創造し、そこに 天使たち——理性と善性を備えた存在——を住まわせました。神は彼らに理性、自由意志、そして私たちのものに似ていながらも、それよりもさらに完璧な様々な能力を授けました。

その存在のある時期、明らかに私たちの物質世界が創造される以前のことで、天使の世界で悲劇が起きました。神に最も近い天使の一人であるデニツァ（ルシファー）を筆頭とする一部の天使たちが、創造主への服従を捨て、天使の世界で反乱を起こしたのです。使徒ヨハネ（神学者）はこの出来事を次のように記述している。「そして、天において戦いが起きた。ミカエルとその天使たちは、竜（悪魔）と戦った。竜とその天使たちもまた、彼らと戦った。しかし、彼らは耐えきれず、もはや天には彼らの居場所がなくなってしまった。そして、大いなる竜、すなわち、悪魔、サタンと呼ばれる、全宇宙を惑わす古き蛇が、地上に投げ落とされ、その天使たちも彼と共に投げ落とされた」（黙示録12:7-9）。主イエス・キリストはこの出来事について、「サタンが稲妻のように天から落ちるのを見た」と述べるだけで、ごく簡潔に触れている（ルカ10:18）。使徒ペテロとユダもまた、この出来事について非常に簡潔に言及しており、天使たちの一部が自らの尊厳を守らず、定められた住まいを離れたことだけを伝えている。このため、彼らは神による最終的な裁きを待つ間、永遠の闇の鎖で縛られた（Ⅱペテロ2:4；ユダ6）。

**注：**先ほど引用したテキストを初めて読んだ際、読者は、この戦いが、地がすでに存在していた時期に天使の世界で起こったものだとも考えるかもしれない。しかし、『ヨハネの黙示録』では、時系列的な順序ではなく、概念的に結びついた複数の出来事を一つの幻の中に統合することが珍しくないことを考慮すると、この黙示録的な描写は、悪魔が神から離反した時点で地球がすで

に存在していたことを示しているのではなく、現在悪魔が地上で私たちと繰り広げている戦いが、実際には天で始まったものであり、彼がその戦いに敗れたのと同様に、主が来られ、彼に対して裁きを下される時、現在の戦いにも敗れるであろうことを示していると考えられる。

聖書のさまざまな箇所を照らし合わせると、明けの星が墮落した原因は、**その高慢であったことが**わかります（シラ書 10:15；テモテへの手紙第一 3:16）。預言者イザヤは、明けの星を高慢な異教の支配者の姿として描くことで、その傲慢さを鮮やかに表現しています：「ああ、明けの星よ、暁の子よ、いかにしてあなたは天から落ちたのか。諸国民を踏みつけにしたあなたは、地に打ち砕かれた。あなたは心の中でこう言っていた。『私は天に昇り、神の星々よりも高く私の王座を掲げ、北の果てにある神々の集まる山に座る。雲の高みに昇り、いと高き方と等しくなる。しかし、あなたは地獄へ、陰府の深みへと投げ落とされた』（イザヤ書 14:12-15）。このイザヤの描写を補完するように、預言者エゼキエルは、高慢なティルス王の姿として明けの明星を描き出している：

「あなたは完全さの印、知恵の満ち溢れ、美の冠である。あなたはエデム、神の園におり、あなたの衣はあらゆる宝石で飾られていた。ルビー、トパーズ、ダイヤモンド、クリソライト、オニキス、ジャスパー、サファイア、カーバンクル、エメラルド、そして金——これらすべてが、あなたのための巢に巧みに嵌め込まれ、あなたに身に着けられ、あなたが造られた日に備えられていた。あなたは、覆い守るために油注がれたケルビムであり、わたしはその務めをあなたに与えた。あなたは神の聖なる山にいて、燃える石の間を歩んでいた。あなたは、創造されたその日から、あなたの中に不義が見出されるまでは、その道において完全であった。あなたの商いの盛んなさゆえに、あなたの内は不正に満ち、あなたは罪を犯した。そこで、わ

たしはあなたを不浄な者として打ち倒し、神の山から、火の石の真ん中から、覆い守るケルビムであるあなたを追い出した。あなたの美しさゆえに、あなたの心は高ぶった。あなたの虚栄ゆえに、あなたはあなたの知恵を滅ぼした。それゆえ、わたしはあなたを地に打ち倒し、王たちの前であなたを恥さらしにする」（エゼキエル書 28:12-18）。

かくして、神聖な光を宿す最高位の天使の一人は、傲慢のゆえに「光の源」から離反し、闇となり、暗黒の種をまく者となった。彼は自らの創造主と肩を並べ、その栄光と威力を奪おうとしたが、結局は自らの無力さと恩知らずさを露呈するに終わった。他者に真に価値あるものを与える力を持たない彼は、嘘を誘惑の主要な武器とし、その結果、嘘はまるで彼の本質そのものとなってしまった。彼が口にすること、行うこと、約束することのすべては、たとえ時に巧妙に真実らしさを装っていても、最も厚かましい嘘に他ならない。彼が絶えず嘘をつくことから、聖書は彼を「サタン」と呼んでいる——これはヘブライ語で「中傷者」を意味する。ギリシャ語では、これは「悪魔」という呼称に相当する。その他、「蛇」、「竜」、「ベエルゼブブ」、「ベリアル」、「闇の君主」、「悪霊の君主」、「敵対者」、「この世の君主」、「人類の敵」、「悪者」といった呼称は、その凶暴さと、その活動の有害性を示している。彼に従った天使たちについて、聖書は彼らを悪魔、悪霊、不浄な霊、あるいは邪悪な霊と呼んでいる。

天へのアクセスを失った悪魔は、清く無垢に創造された人間たちに全注意を集中させた。最初の人類が誘惑された詳細については、『創世記』第3章に記されている。エバの方がアダムよりも影響を受けやすいと見抜いた悪魔は、まさに彼女に向かって、次のような狡猾な問いを投げかけた。「神は、本当にあなたがたに、楽園のあらゆる木の実を食べることを禁じられたのですか？」エバは

、その問いかけに潜む狡猾さに気づかず、誘惑者に何が許され、何が禁じられているかを説明した。エバが純真でおしゃべりな相手だと見抜いた悪魔は、彼女を説得し始め、神は嫉妬から、善悪の知識の木の実を食べることを許さなかったのだと説明し、しかし、もし彼らが自分、すなわち蛇の言うことを聞けば、自分たちも神のようになり、あらゆる秘密を知るようになるだろうと説き伏せる。エバを神の戒めを破るように誘惑し、彼女を通じてアダムをも誘惑する。こうして悪魔は、罪という致命的な毒によって人間の性質を蝕んでいく。私たちの先祖の人生におけるこの悲劇的な瞬間を指し示して、救い主は悪魔を「初めから人殺し」と呼びました（ヨハネ8:44）。

罪を犯したことで、人々は神との交わりの喜びと、エデムで生きる機会を失った。彼らの中で霊的な力と肉体的な力のバランスが崩れ、道徳的に弱くなり、罪を犯しやすい存在となった。罪深い者となった彼らは、命の木へのアクセスを失い、死すべき存在となった。『ソロモンの知恵』の著者は、悪魔を人類のあらゆる不幸の根本原因と見なしている。「神は人を朽ちることのない者として創造し、御自身の永遠の存在の像として造られたが、悪魔の嫉妬によって死がこの世に入り込んだ」（ソロモンの知恵 2:23-24）。

無邪気な人々をその致命的な毒針で襲い、蛇は勝利を誇った。しかし、主は彼に、彼が始めた戦いは終わっていない、むしろ始まったばかりであると予告された。妻を誘惑した彼は、やがて彼女の子孫によって自ら敗北を喫することになる。「わたしは、あなたと女との間に、またあなたの子孫と彼女の子孫との間に敵意を置く。その子はあなたの頭を砕き、あなたはその子の踵を噛むであろう」（創世記3:15）。この驚くべき予言は、人類のその後の歴史を決定づけ、それは本質的に、誘惑の霊と神を求める人々との戦いとなった。最も直接的な意味において、この預言は、主イエス・キリ

ストが十字架上で苦難を受け（かかとを刺され）、古き竜の頭を打ち砕かれたときに成就した。その時、十字架上で主は「[闇の王国の]支配者や権威者たちから力を奪い、彼らを公然と恥辱にさらし、ご自身によって彼らに勝利を収められた」（コロサイ2:15）。より広い意味において、この預言は、キリストの力に支えられて誘惑者を退ける（ルカ10:19）とき、各クリスチャンの人生においても成就している。もっとも、クリスチャン自身も、キリストのように、時に肉体的な苦しみを受けることがある。

旧約聖書のその後の記述では、悪魔についてあまり語られていない。それにもかかわらず、それらの記述は一貫して、悪魔を狡猾な誘惑者であり、あらゆる悪の種をまく者として描いている。例えば、悪魔は義人ヨブを、足から頭まで激しい腫れ物で襲った（ヨブ記1:6-22）；サウル王を支配し、彼を苦しめた（列王記上16:14-15）。悪魔はダビデに、民の国勢調査を行うという虚栄心にあふれた考えを吹き込んだ（歴代誌上21:1）。悪魔アスマデウスは、ラギルの娘サラの夫たちを殺害した（トビト記3:8）。同じ嫉妬、狡猾さ、悪知恵といった性質をもって、悪霊は『列王記』（列王記下22:19-23）や預言者ゼカリヤの書（ゼカリヤ書3:1-2）においても描かれている。

人類が本来持つ宗教性を踏まえ、悪魔はこの宗教性を歪め、迷信や狂信へと導こうとしている。悪魔こそが、人々にありとあらゆる偽りの神々——自然の力、星や惑星、伝説の英雄、動物、怪物、そして原始人の想像力をかき立てるあらゆるもの——を神として崇めるよう教えたのである。迷信に惑わされた異教徒たちは、様々な物を神として崇めることで、その榮譽を自分たちへのものとして受け取る悪霊たちを喜ばせていることに気づかなかった（申命記32:17；コリントの信徒への手紙一10:20）。

新約聖書における悪霊に関する記述。キリストの降誕の頃までに、偶像崇拜やあらゆる種類の迷信が広まったことは、人間社会における悪霊の過度な横行を助長した。この横行の表れとして、悪霊に取り憑かれた人々、すなわち「悪霊に取り憑かれた者」が多数存在していた。人々への憐れみからこの世に来られた主イエス・キリストは、まず、悪魔の暴虐から人々を解放し始められた（マタイ12:24-29；Iヨハネ3:8；ヘブル2:14）。福音書のページには、悪霊に取りつかれた人々の癒やしの事例が数多く記されています（マタイ4:24、8:16、9:31；マルコ1:32-34；ルカ4:41、8:2、11:4）。中でも、悪霊に取りつかれた少年（マタイ17:14-21）、カナンの女の娘（マルコ7:24-29）、そしてガダラ人の二人の悪霊に取りつかれた者（マタイ8:28-34、マルコ5:1-19）の癒やしの事例は、他の事例よりも詳しく記述されている。後者の事例で注目すべきは、その人に一人の悪霊ではなく、一軍団、すなわち膨大な数の悪霊が取り憑いていたという点である。

悪霊に取りつかれた人々の癒やしに関する福音書の記述を注意深く検討すると、そこではてんかんやその他の神経疾患について語られているのではなく、目には見えないものの、他者を苦しめることに喜びを見出す、完全に実在する悪意ある存在を**追い出すこと**について語られていることが確信できる。

疑う者たちの前で悪魔たちの獰猛さを明らかにするため、主はある時、悪魔たちがその人から、近くで草を食んでいた豚の群れへと移り住むことを許された。すると、驚愕した群衆の目の前で、狂乱した巨大な豚の群れが崖へと駆け下り、湖に飛び込み、そこで溺死した（マルコ5:13）。霊がある存在から別の存在へと瞬時に移り住んだというこの事実だけでも、通常 of 精神疾患の可能性を完全に排除している。福音書やその他の悪霊追放に関する記述を読むと、悪霊に取り憑かれた状態には

一連の明確な**症状**があることが明らかになる。第一に、悪霊に取り憑かれた者たちは、神聖なものや神的なもののすべてに対して特有の否定的な反応を示す。例えば、キリストの姿を目にしたとき、悪霊に取り憑かれた者たちは痙攣を起こし始めた。不幸な人間に取り憑いた悪魔たちが、キリストを神の子と見抜き、憑依された者の口を通して、キリストに罰を先延ばしにし、彼らを深淵に送らないよう懇願することも珍しくなかった（マタイ8:29；マルコ5:7）。しかも、彼らの会話の間、悪霊に取りつかれた者の声は不自然で、人間離れしたものになった。周囲の人々には、話しているのは人間ではなく、誰かが彼を通して話していることが明らかだった。最後に、悪霊が追い出された直後、かつて悪霊に取りつかれていた人々は普通の人間に戻り、悪霊に取りつかれた兆候はすべて跡形もなく消え去った。こうした悪霊に取り憑かれた状態特有の症状は、現代の悪霊に取り憑かれた人々にも見られる。懷疑論者が奇跡を信じたくないのであれば、せめて悪霊に取り憑かれた人々の振る舞いから、霊的な世界が確かに存在すると結論づけるべきである。悪霊に取り憑かれた状態については、後ほど再び取り上げる。

**使徒たちによる悪霊の追い出し。**世界宣教という今後の使命に向けて弟子たちを準備する中で、主はとりわけ、悪魔の暴虐から人々を解放する働きを続けるよう彼らに命じられました。「そして、主は彼らを二人ずつ〔町や村へ〕遣わし始め、汚れた霊たちを追い出す権威を彼らに与えられた」（マタイ10:1、ルカ9:1、マルコ6:7）。使徒たちは、汚れた霊たちが自分たちの言葉に従順に従うとは予想していなかったため、最初の伝道旅行から戻ると、喜びながら救い主にこう報告した。「主よ、あなたの御名によって、悪霊たちまでもが私たちに従いました」（ルカ10:17）。その時、主は、あらゆる不浄な超自然的な力を追い払う権能を彼らに与えていることを、さらに明確に確認された。／

見よ、わたしはあなたがたに、蛇やサソリ、また敵のあらゆる力に立ち向かう権能を与える。何ものもあなたがたを害することはない」（ルカ10:19）。天に昇られる前に、主は悪魔の力の打ち砕きが教会の顕著なしるしとなることを予告されました。「信じる者たちには、次のようなしるしが伴う。すなわち、わたしの名によって悪霊を追い出し……」（マルコ16:17）。

そして実際、福音の伝播には、常に悪霊の追い出しが伴っていました。『使徒言行録』には、使徒ペテロによって行われた悪霊に取りつかれた人々の癒やしの事例（使徒言行録5:16）が記されており、続いて、使徒フィリポによっても、「多くの悪霊に取りつかれた人々から、悪霊が叫び声を上げて出て行った」（使徒行伝8:7）という事例があり、さらに使徒パウロが、ある少女から占いをする悪霊を追い出した（使徒行伝16:16-18）。しかも、神の恵みは時にこれほど豊かに働いたため、例えば、使徒パウロの所有物を憑依された人々に当てると、悪霊が患い人から出て行ったほどであった（使徒行伝19:12）。

使徒の時代以来、悪霊に対する呪文のような祈りは、洗礼の秘跡に欠かせない要素となった。とはいえ、主イエス・キリストが闇の支配者を打ち負かし、人間に対するあらゆる権威を彼から奪い取り、彼とその不浄な霊たちと戦うための偉大な力を教会に与えてくださったとはいえ、最後の審判の時が来るまで、神の不浄な霊たちは私たち一人ひとりにとって、大きく絶え間ない危険であり続けることを忘れてはなりません。このため、主イエス・キリストは、私たちに常に、神に「私たちを誘惑に遭わせず、悪から救い出してください」と祈るよう教えられました。「目を覚まし、警戒しなさい」と使徒ペテロはクリスチャンに呼びかけています。「あなたがたの敵である悪魔は、ほえたける獅子のように、誰かを飲み込もうとしてうろついているからです」（ペテロの手紙一5:8）。

天から追放された悪魔とその悪霊たちは、私たちに近い領域、いわゆる「空中の領域」にその活動を集中させました。キリストの信仰に反対する人々や、罪深い生活を送る人々を、悪魔は自分の配下と見なし、教会と戦うために利用しています。使徒の言葉によれば、こうした人々は「*空中に支配する支配者、すなわち、今や反抗の子らの中に働いている霊の意志に従って*」生きているのです（エペソ2:2）。

それでは、悪魔が人々の間でどのように働きかけ、どのような手法を用いているのか、さらに詳しく見ていきましょう。特に、悪霊憑きや憑依、オカルトや魔術を通じた誘惑や人々の隷属化について取り上げます。

## 悪霊憑き および憑依

聖書は、悪霊憑きを「憑依」や自然発生的な精神疾患とは区別しています（マタイ4:24、9:32-34；マルコ1:34；ルカ7:21、8:2）。人間の性質は極めて複雑であるため、悪霊憑きの本質を正確に説明することは困難です。しかし、それが単に悪霊の影響——すなわち、闇の霊が人の意志を罪へと誘おうとする状態——とは異なることは明らかである。その場合、人は自らの行いに対する支配力を保っており、直面した誘惑は祈りによって追い払うことができる。また、悪霊憑きは、悪魔が人の理性と意志を支配してしまうような憑依とも異なる。

どうやら、憑依においては、悪霊が身体の神経運動系を支配するようだ——まるでその身体と魂の間に侵入するかのよう、その結果、人は自身の動きや行動に対する制御を失ってしまう。しかし、憑依状態において、悪霊が憑かれた者の魂の力を完全に支配しているわけではないと考えられる

。魂の力は単に表に出せなくなっているに過ぎないのだ。魂はある程度、自発的に思考し、感じる能力を保っているが、身体の器官を制御する力は完全に失われている。

魂をピアニスト、体をグランドピアノに例えるならば、悪霊はピアニストと楽器の間に割り込み、狂ったように鍵盤を叩きまくる凶暴なゴリラに喩えることができる。自分の体を制御できない憑依された人々は、彼らを支配した悪霊の犠牲者であり、したがって自らの行為に対して責任を負うことはできない。彼らは悪霊の奴隷なのである。

憑依は様々な外見的な形をとる。時には、憑かれた者たちは暴れ回り、周囲のものをすべて粉々にし、周囲の人々に恐怖を与える。その際、彼らはしばしば超人的な力を発揮することがある。例えば、ガダラ人の憑かれた者は、自分を縛ろうとしたどんな鎖も引き裂いた（マルコ5:4）。また、悪霊に取りつかれた人々は自らに様々な傷を負わせることがあり、例えば、新月のたびに火の中や水の中に飛び込んでいた少年が悪霊に取りつかれていた（マタイ17:15）という例がある。しかし、悪霊に取りつかれた状態は、人々が一時的に本来の能力を失うという、より静かな形で現れることも少なくない。例えば、福音書には、主が悪霊から解放してやるとすぐに、再び普通に話せるようになった、悪霊に取りつかれた口がきけない人の話が記されている。あるいは、主が悪霊から解放してやると、背筋を伸ばすことができた、背を丸めた女性の話もある。この不幸な女性は、18年間も前かがみの姿勢で過ごしていた（ルカ13:11）。

場合によっては、悪霊に取りつかれた人々が透視能力や予言の能力を示すこともあります。例えば、『使徒言行録』には、人々の未来を予言することで、その主人に多額の収入をもたらしていた予言者の少女の事例が記されています。使徒パウロが彼女から悪霊を追い出したとき、彼女はその能

力を失った（使徒行伝16:16-19）。キリスト教の信仰が広まるにつれて、悪霊に取り憑かれる現象は次第に消えつつあったが、それでもなお、現在でも存在している。

何が憑依を引き起こすのか、そして誰が邪悪な霊に人間を支配し、苦しめる権利を与えているのか。40年以上にわたり憑依の問題に人生を捧げ、このテーマについて一連の重要な研究を著したドイツ人牧師、クルト・コッホ教授によれば、彼が知る限りすべての事例において、憑依の原因はオカルトへの傾倒にあったという： その人自身が人生のある時期に オカルトに没頭していたか、オカルト師に助けを求めていたか、あるいは以前にその家族の中で誰かがそれに携わっていたかのいずれかである。ここでいうオカルトとは、霊の召喚、スピリチュアリズム、占いおよび占い師への相談、ヨガ、超能力による治療、白魔術や黒魔術、そして（たとえ無意識であっても）墮落した霊の力を借りるあらゆる行為を指します。このように、オカルトに傾倒する人々は、自分自身だけでなく、子供や孫までも危険にさらしているのです。

現代は、キリスト教からの離反が進み、オカルトへの傾倒がますます強まっている時代であり、ますます多くの人々が邪悪な霊による暴力の被害に遭い始めています。確かに、精神科医たちは悪魔の存在を認めることを躊躇しており、概して、悪霊に取り憑かれた状態を自然な精神疾患の範疇に分類しています。しかし、信仰を持つ者は、いかなる薬や心理療法も悪霊を追い払うことはできないということを理解しなければならない。ここには神の力が必要である。

以下に、悪霊憑きを自然な精神疾患と区別する特徴的な兆候を挙げる [Kurt E. Koch, “Demonology Past and Present,” Kregel Publications, Grand Rapids, Michigan, 1973, pp. 31-52]。

聖なるもの、および神に関連するあらゆるものに対する嫌悪感：聖体拝領、十字架、聖書、聖水、イコン、プロスフォラ、乳香、祈りなど。 しかも、憑依された者は、聖なる物が視界から隠されているときでさえ、その存在を感じ取ります。それは彼らを苛立たせ、体調を崩させ、さらには激昂状態にさえ陥らせます。

声の変化。この症状は、通常の神経疾患では見られない。言葉は脳によって制御されているが、悪魔は脳を完全に支配することはできず、声帯のみを支配しているため、憑依された者の口から発せられる言葉は不自然に聞こえる。

透視能力。悪魔は未来を知らない。天使もまた未来を知らないのと同じで、未来を知っているのは主なる神のみである。 しかし、悪魔は過去を知っており、普通の人々よりもはるかに広い範囲で現在を見通すことができる。霊である彼らは、遠く離れた場所、さらには世界の反対側で起きていることさえ、ほぼ瞬時に透視能力者に伝えることができるため、聞き手には、あたかも透視能力者が未来を知っているかのように思えることがある。透視能力者が未来を予言する場合、それは常に単なる推測に過ぎない。 悪魔たちは、豊富な人生経験を持ち、はるかに多くの人々を知っているため、時にはこれから起こることをかなりの確に予見できることがある。 もちろん、彼らはしばしば間違える。さらに、彼らの予言が的中するのは、それがまさに運命づけられていたからではなく、その人自身が自分の未来に関する何かを心に植え付け、無意識のうちにそれに向かって努力し始めることで、予言されたことの実現を助長してしまうからである。

突然の治癒。精神科医が精神疾患の患者を治すには数年を要することもある。一方、悪霊からの解放は瞬時に起こり、その後、悪霊に取り憑かれた兆候はすべて消え去り、その人は正常な状態に戻る。

突然の移住。憑依された者に宿っていた悪霊が、突然、その者を追い出そうとする者やその家族の誰かに移り住んでしまう危険性がある。この症状は、医師や精神科医がさらされる「感染」の危険とは異なるものである。精神疾患患者と常日頃から接している人々が、自らも様々な精神的な異常を現し始めることがあることは知られている。その際、患者自身は、担当医が「感染」したからといって、何の安堵も得られない。一方、悪霊の移り住みというケースでは、かつて悪霊に取りつかれていた人は完全に解放される一方で、別の人物が同様に突然、その悪霊の影響下に置かれることになる。

主イエス・キリストは弟子たちに悪霊を追い出すための強力な手段をお与えになりましたが、誰もがこの働きに取り組むべきというわけではありません。新約聖書からは、不浄な霊に関する一つの顕著な事実が明らかになっています。すなわち、彼らは**キリストの御名の前では全く立ち向かうことができない**ということです。主イエス・キリストは、彼らに対して絶対的かつ抗しがたい権威をお持ちなのです。救い主が地上におられた頃、使徒たちは、ある男がキリストの御名によって悪霊を追い出していることに気づきました。戸惑った使徒たちは、このことをキリストに報告し、見知らぬ者が御名を用いることを禁じる許可を求めました。しかし、主は彼らにこう答えられました。「**禁じてはならない。あなたがたに敵対しない者は、あなたがたに味方する者だからである**」(ルカ9:50)

）。明らかに、この見知らぬ者は、孤立して過ごしていたとはいえ、心からキリストを信じていたのです。

しかし、たとえキリストの御名という武器を持っていたとしても、一般人が汚れた霊と戦うのは危険である。『使徒行伝』は、使徒たちがキリストの御名によって奇跡を行い、とりわけ悪霊を追い出すことが、人々にどれほど大きな感銘を与えたかを伝えている。そこで、あるユダヤ人の祭司スケワの息子たちは——彼ら自身はキリスト教徒ではなく、生計を立てるために呪術を行っていた——使徒たちが用いていた新しい方法を試してみたいと思った。そして彼らは、ある悪霊に取りつかれた者から悪霊を追い出すために、キリストの御名を呼び始めた。すると突然、その悪霊に取りつかれた男が彼らに言った。「イエスのことは知っているし、パウロも知っている。だが、お前たちは誰だ？」そしてすぐに呪術師たちに襲いかかり、彼らを打ち負かして圧倒的な力を振るったため、彼らは裸で打ちのめされたまま、その家から逃げ出した（使徒行伝19:14-17）。

この出来事から、キリストの御名は、実用的な目的や虚栄心のためではなく、人の救いのために、深い信仰と畏敬の念をもって呼び求めるべきであると結論づけられる。その際、キリスト教的な生き方から生じるキリストの力によって、自分自身が守られていることが極めて重要である。一般的に、悪霊追放の件は、教会からその権限を与えられた人々——司祭、司教、霊的な長老たち——に委ねるのが最善である。この点において、個人的な熱意や無謀な行動は極めて危険である。悪魔は極めて危険で狡猾な敵である。傲慢にも悪魔と公然と戦おうとする者は、その軽率さの代償として、非常に大きな犠牲を払うことになるかもしれない。

憑依は、悪魔が人間の**理性と意志そのものを**支配してしまうという点で、悪霊憑きとは異なります。悪霊憑きの場合、悪魔は人間の体を支配しますが、その理性と意志は、無力ではあるものの、比較的自由なまま残ります。もちろん、悪魔は私たちの理性や意志を無理やり支配することはできない。悪魔は、人間自身が神への嫌悪や罪深い生活によってその影響下に陥っていくにつれて、徐々にそれを成し遂げていくのである。悪魔による憑依の例は、裏切り者ユダに見られる。福音書の「サタンがユダに入った」（ルカ22:3）という言葉は、悪霊に取り憑かれた状態ではなく、裏切り者である弟子自身の**意志が**支配されたことを指している。当初、ユダは純粹で利己的でない動機から使徒たちに加わった。しかし、やがて彼はキリストへの熱意を失い、自らの使命の意義に失望した。これまでの労苦を完全に無駄にしないため、彼は、善良な人々が使徒たちの必要や貧しい人々への援助のために献金していた共同の資金から、密かに自分への報酬を取り始めた。彼自身は気づかなかったが、悪魔は徐々に彼の意識を曇らせ、その意志を操り始めていた。ついに最後の晩餐の席で、悪魔はこの不幸な弟子を完全に支配し、まず卑劣な裏切りへと、そしてその後、自殺へと駆り立てた。

悪魔に取り憑かれたもう一つの例は、キリストに敵対したユダヤ人の指導者や律法学者たちに見られる。キリストが何を語ろうとも、彼らはすべてに異議を唱え、拒絶した。キリストがどれほど偉大で高潔な行いをしようとも、彼らはすべてを非難し、嘲笑した。これらの高慢な者たちは、悪魔が人類の救いの業を妨げるために、彼らの意識と意志を支配していることに気づかなかった。だからこそ、主は彼らにこう言われたのです。「あなたがたの父は悪魔であり、あなたがたは、あなたがたの父の欲望を遂げようとするのです」（ヨハネ8:44）。教会の歴史を通じて、特に私たちの苦難に満ちた祖国における革命の時代には、このような神に敵対する者たちが数多くいました。

悪魔に取り憑かれた人々とは、単なる宗教的無知者や普通の罪人ではありません。彼らは、「この世の神が彼らの心を盲目にしている」（Ⅱコリント4:4）人々であり、神と戦うために利用されているのです。悪霊に取り憑かれた者たちは、悪しき者の哀れな犠牲者であり、憑依された者たちは、その積極的な僕たちなのです。

## 悪しき者の罠

「誘惑によって世は災いに遭う」と主は言われたが、すぐにこう付け加えられた。「誘惑は避けられないからである」（マタイ18:7）。「避けられない」とは、明らかに私たち自身の益のためである。主は、私たちが慢心したり油断したりすることを望んでおられるのではなく、霊的に成長し、完成されていくことを望んでおられるのです。

誘惑の問題について、主は「雑草のたとえ」の中で部分的に明らかにされた。種を蒔く人（主）は自分の畑に良い種（善）を蒔いたが、その敵（悪魔）はそれらの間に雑草（誘惑）を蒔いた。 、僕たちが芽を出した雑草に気づき、主人に雑草を取り除く許可を求めたとき、主人は「いいえ、雑草を取り除く際に、小麦まで一緒に引き抜いてしまわないように。収穫の時（すなわち裁きの時）まで、両方を一緒に育てておきなさい」と言って許可しませんでした。 そうして初めて、「天使たちは、御国からすべての誘惑と不法を行う者たちを集め、彼らを火の炉に投げ込む」（マタイ13:24-42）のである。言い換えれば、時期尚早に誘惑を取り除いてしまうことは、人々の霊的成長の過程を損なうことになる。

植物や動物の世界において、生存競争がより完全で耐久力のある種の発達につながるのと同様に、誘惑との闘いもまた、より堅固で徳のある魂の形成につながる。高価な合金が火によって試されるように、また弟子が試験によって試されるように、将来の天の御国の市民もまた、誘惑によって試されるのである（Iペテロ1:7）。

聖書のこれらの箇所やその他の箇所から、誘惑する霊の限定的な活動は神の計画の一部であり、人々の益のために神によって許されていると結論づけられる。神は、自らその誘惑に屈した者以外には、誰に対しても、その霊が恣意的に支配することを許さない。

かつては清らかで神に近かった天使が、なぜ今や、人々をあらゆる悪事へと駆り立てるという、これほど屈辱的で汚らしい行いに手を染めるようになったのか、どう説明すればよいのだろうか。ある人々は、彼がサディストとして、他者を苦しめることに快樂を見出しているのだと考えている。それは確かに一理あるが、他にもっと重要な理由がある。思い出してほしい。ルシファーは**傲慢**のゆえに神から背いたのだ。彼は、その栄光と力において創造主と肩を並べたいと願ったが、神に忠実であり続けた天使たちに敗北を喫した今、せめて可能な限り多くの人間を支配下に置こうと画策している。人々が心の中に善の欠片を宿し、神の保護下にある限り、悪魔は自力ではこれを達成できない。誰かを支配下に置くためには、悪魔はまずその者を道徳的に墮落させなければならない。悪魔は**罪**を通じてこれを実行する。何千年にもわたって人々を誘惑し続けてきた悪魔は、この卑劣な術を極めたのである。その主な手口は以下の通りである：

隠密さ、

順応、  
漸進性、  
執拗さ、  
嘘。

人が誘惑に屈するためには、まず第一に、その誘惑を自らの欲望だと受け入れることが重要である。そうすれば、その人は自らの幸福と安寧のために重要だと考えるものを、自ら熱心に追求するようになるからだ。それゆえ、悪魔はあらゆる**手段を講じて**自らの存在を**隠し**、好都合であるかのように見せかけた状況の陰に身を潜めるのである。さらに、誘惑を行う前に、悪魔は人の性格や傾向、弱点を注意深く観察し、それに応じて誘惑の手法を**調整する**。

『使徒言行録』にある次の物語は、この誘惑の手法を如実に示している。初期のキリスト教徒たちは、非常に結束が固く、心を一つにして暮らしていたため、すべてのものを共有していた。中でも裕福な人々は、自分の財産を売り払い、その収益で困窮している兄弟たちを助けていた。このような誠実な兄弟愛のおかげで、キリスト教徒の中に困窮する者は一人もおらず、外部の人々は彼らを社会全体の模範と見なしていた。そこで、ある裕福な男アナニアは、貪欲だと思われるのを恐れて、自分も財産を売り払い、その収益を共同体の必要に充てることにした。しかし、完全に貧しくなるのを避けるため、彼は妻のサッフィラと共謀し、使徒たちには売却益の一部だけを渡し、残りは「いざという時のために」隠しておくことにした。原則として、自分たちの財産を処分するのは彼らの権

利であった。欺瞞とは、彼らが自分たちを全く利己的ではないかのように見せかけようとした点にあった。アナニアが使徒ペテロに金の一部を持ち込み、自分の全財産を献げると厳粛に宣言したとき、使徒は天からの啓示によってアナニアが自分を欺いていることを知り、こう言った。「アナニアよ！なぜ、サタンに、聖霊に嘘をつき、土地の代金の一部を隠そうという考えを心に植え付けさせたのか。あなたが所有していたものは、もともとあなたのものだったのか、それとも だったのか？……あなたは人に対してではなく、神に対して嘘をついたのだ」（使徒行伝5:1-11）。この言葉を聞いたアナニアは、その場で死んでしまった。

悪魔がアナニアの臆病さと虚栄心を巧みに利用した様子が見えてくる。アナニアは自分の財産に執着していたが、同時に寛大な献金者として評判を得たいとも思っていた。そこで悪魔は、財産を守りつつ、同時に皆からの感謝を勝ち取るという、見事な妥協案を彼に吹き込んだのである。もしアナニアが、自分の財産のほんの一部しか献金していないと正直に認めていれば、そこに何ら非難すべき点はなかっただろう。しかし、彼は虚栄心から欺瞞に走った。彼は人々を欺くことはできたが、神を欺くことはできなかった。なぜなら、主は、自分の財産を貧しい人々に分け与え、貧しさの十字架を背負って御後に従う者たちに、偉大な報いを約束されていたからである。

「漸進性」は、誘惑者が巧みに用いるもう一つの手段である。悪に対する自然な嫌悪感を利用し、悪魔は人間に、些細な妥協という形で少しずつ罪を犯すよう仕向ける。その際、悪魔は人間を安心させ、「これは単なる一度きりの逸脱に過ぎず、望みを叶えた後も、あなたは誠実で高潔な人間であり続ける」と囁く。もし人が誘惑に屈すれば、悪魔はその後、また「わずかな」規範からの逸脱という名目のもと、同様の、しかしより重い罪を犯すよう提案してくる。「後で悔い改めればいい

」と、誘惑者はなだめる。こうして、人が誘惑に屈するにつれて、罪の泥沼にますます深く沈んでいき、自分が情欲の意のままの奴隷となり、闇の君主の餌食になってしまったことに気づかないのである。

この点を、次の例で説明しよう。ある人が道中で、突然、落ちている財布を偶然見つけたとしよう。それを開けてみると、そこにはある金額のお金が入っていた。さらに財布の中には、持ち主の名前と住所が書かれた名刺も入っていた。彼の最初の考えは、他人の物を一刻も早く返すことだった。しかし、そこへ誘惑者が耳元へ近づき、この拾得物を利用するのが最も賢明だと囁きます。「これほど困難な時に、まるで天の導きがあなたにお金を送ってくれたようなものだ。それに、お金は誰の目にも見える場所に転がっていたのだから、他人が拾う可能性もあった。だから、これは盗みではない。」そこで良心が介入し、他人のものを横取りするのは罪であり、持ち主を探すよう努めるべきだと囁く。彼にとってもそのお金は必要だ。しかし悪魔は良心の囁きに異議を唱え、論理的にこう説得する。「いや、何の問題もない。他人のポケットを漁ったわけじゃない。拾ったものは君のものだ。」もし人が良心の声に従って拾ったものを返せば、正直に行動し、他人の不幸に乗じなかったという内なる満足感を覚えるだろう。しかし、もし誘惑に負けてしまえば、悪魔は彼をさらに不正直な行為へと駆り立て、彼を詐欺師、泥棒、強盗にしようと仕向けるだろう。

悪魔の「漸進法」は、十二使徒の一人であるユダを例に挙げると、特に明白に見て取れる。ユダは会計係の役職にあり、人々が使徒たちの生活費や貧しい人々への施しのために寄付を投じる小箱を管理していた。金銭を扱うことは常に誘惑のきっかけとなり、福音書からも明らかなように、ユダはその誘惑に屈してしまった。彼は少しずつ、共同の箱から自分の必要のために「借りる」ようにな

った。罪人を憐れんだ主は、ユダを丁寧に諭そうとしたが、成功しなかった。ユダは自覚することなく、泥棒となってしまった。ついには、金への欲望が彼を完全に支配し、三十枚の銀貨と引き換えに、彼は自分の師を売り渡してしまった。こうして、悪魔はキリストの最も親しい弟子の一人を徐々に支配し、彼を恐ろしい罪と自殺へと追い込んだのである。

人間の意志に直接アクセスできない悪魔は、外部からの刺激に左右される思考や感情を通じて、その意志を操ろうとする。それゆえ、悪魔は私たちの耳や目に、誘惑的なものを必死に提示しようとするのだ。人が罪深い思考や感情に屈していくにつれて、悪魔はその人の意志を掌握し、その人を囚えるのである。

悪魔は私たちの気まぐれさを熟知している。原則として、どんな人間であれ、たとえ何千回も誘惑を乗り越えてきたとしても、一瞬の油断や不注意の瞬間にいつでも罪に屈してしまう可能性があることを、悪魔は知っている。それゆえ、悪魔は人間が最期の息を引き取るまで、決してその人を放っておかない。またしても誘惑に失敗すると、悪魔は**執拗**に新たな機会を待ち構え、再び人を罪へと誘い込もうとする。熟練した心理学者である悪魔は、人が疲れや悲しみに襲われている時に特に弱くなることを知っている。また、時には、人間が単に気を緩め、警戒心や慎重さを失うのを待つこともある。そして、まさにその瞬間に悪魔が現れ、嵐のように人間に襲いかかり、その人が最も陥りやすい罪へと突き落とすのだ。

まさにその執拗さのおかげで、悪魔は旧約聖書の時代における最も偉大な義人——ダビデ王を誘惑することに成功した。ダビデは、数多くの迫害や人生の試練を乗り越え、ついにイスラエルの王位に就いた。敵は萎縮し、戦争は終わり、平和で豊かな時代が訪れ、ダビデは少し気を緩めてしまった

。ある晩、自宅の屋上に上がった彼は、隣の家でプールに浸かっている美しい女性を目にした。彼女は誰なのか知りたくなった。調べてみると、彼女はダビデの軍隊の高官の一人の妻、ビルサピアであることがわかった。美しい隣人との出会いは欲望へと変わり、王は罪を犯してしまった。ビルサピアはその不義の関係によって妊娠してしまったが、ユダヤの法律では、そのような行為は石打ちの刑に処されることになっていた。彼女を不名誉で苦痛に満ちた死から救いたいと願ったダビデは、急いで彼女の夫を遠征先から呼び戻し、ビルサピアと過ごす機会を与え、そうすることで、彼女が夫の子を身ごもったと思わせようとした。しかし、バテシェバの夫はなぜか彼女と一緒に暮らすことを拒み、まもなく、ある敵の都市を包囲していた自分の軍隊へと戻ってしまった。状況は絶望的と思われたが、そこで悪魔はダビデに次のような天才的な解決策を吹き込んだ。すなわち、ビルサベエの夫ウリヤを戦場の最も危険な場所に送り込み、敵の手によって彼を戦死させるというものである。案の定、最前線に送り込まれたウリヤは敵の矢によって命を落とし、ダビデは彼の未亡人と結婚する機会を得て、こうして姦通の罪を隠蔽することになった。その際、悪魔はダビデの理性をこれほどまでに曇らせたため、彼は自らの二重の罪がいかに恐ろしいものであるかを理解する能力さえ失ってしまった。預言者ナタンが作り上げた寓話の中で、王に類似した事例について裁きを下すよう迫った後になって初めて、ダビデは自らに死刑宣告を下してしまったことに気づいた。恐怖に駆られて、彼は神の前でひざまずき、公に悔い改め始めた（列王記下11章）。彼はこの罪を決して自ら許すことはできず、生涯にわたって悔い改め続け、私たちにその悔い改めの祈り（詩篇50篇）を残しました。その祈りは、今もなお悔い改める罪人たちの心を揺さぶっています。こうして、憐れみ深い主は、堕ちた御自身の義人を悪魔の罠から救い出されたのです。

この出来事や類似の事例を通して、主は私たちに慢心してはならないと教えておられます。「立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい」（コリントの信徒への手紙一 10:12）。もし悪魔がその限りのない厚かましさをゆえに、救い主さえも誘惑しようとした（マタイ4:3-10）のであれば、いったい誰がその策略から安全と言えるのでしょうか。それゆえ、私たちに警告して、主はこう教えられます。「霊は目覚めているが、肉は弱い。誘惑に陥らないように、目を覚まして祈りなさい」（マタイ26:41）。

そして、悪魔のあらゆる活動と本質に浸透している主な手口は、嘘である——至る所で、常に嘘——最も厚かましく恥知らずな嘘だが、信憑性を高めるために、しばしば真実の断片を巧みに混ぜ合わせているのだ！ だからこそ、主は悪魔を「偽り者であり、偽りの父」と形容されたのです（ヨハネ8:44）。

悪魔は、私たちの認識の中で物事を原形を留めないほど歪めようとします。些細な失敗を、取り返しのつかない大惨事のように見せかけ、取るに足らない快樂や一時的な利益を、まるで人生の目的であるかのように、最も重要な事柄として描くのです。罪を犯させる際、悪魔は「これはごく自然で許される弱さだ」という考えで私たちを安心させます。そして、人が罪を犯すと、悪魔はその人を絶望に陥れ、「あなたは創造主を永遠に怒らせてしまったのだから、悔い改めても無駄だ」と吹き込みます。何らかの情欲に溺れている人に対しては、悪魔は「あなたは改心しようとするにはあまりにも弱すぎる」と説得します。一方、聖なる生活を送る人に対しては、悪魔は高慢へと誘おうとする。哲学者の戯言や様々な宗教的な作り話を、彼は素晴らしい啓示であるかのように見せかけ、福音の教えを退屈で奇妙なものとして描く。全力を尽くして霊的な生活を目指す人を、彼は高慢と自惚れを

通じて墮落させようとする。時には、その人が自分こそが他者より優れていると思い込ませるために、明るい天使やキリストご自身の姿で現れることさえある（Ⅱコリント11:14）。聖人の伝記には、高い靈的境地に達した修行者たちを、悪魔がそのような幻視によって誘惑した事例が数多く見られる。

抑えがたい権力への渴望に駆られ、悪魔は人間のあらゆる自然な弱さを、抑えがたく忌まわしい情欲へと変えるために、労力も時間も惜しまない。悪魔は、人間が自らを完全に汚し、動物よりも劣った存在になることを望んでいる。そうして罪を通じて、悪魔はその人間に対する支配権を獲得し、彼を自分の奴隷とし、従順な道具とするのである。

しかし、主イエス・キリストのおかげで、この悪魔の支配は不安定であり、その鉄の鎖は蜘蛛の巣よりも弱い。罪人が悔い改めて神に立ち返るだけで、悪魔のすべての支配はカードの家のように崩れ去る。「神の御子が現れたのは、悪魔の業を滅ぼすためである」（Ⅰヨハネ3:8）。まさに主こそが、強い者を縛り、その宝物を奪い取った「最も強い方」である（マタイ12:29）。それゆえ、助けと保護を求めて、救い主のもとへ急ぎましょう。堅固な信仰と徳ある生活をもって墮落した靈に立ち向かえば、約束通り、その靈は私たちから逃げ去るでしょう（ヤコブ4:7）。

## オカルト主義の誘惑

「御靈は、終わりの時に、ある人々が信仰から離れ、惑わす靈や悪魔の教えに耳を傾けるようになると、はっきりと告げています」（テモテへの手紙第一 4:1）

。

子供が母親に惹かれるように、人は本能的に神に惹きつけられます——特に人生の困難な時にはなおさらです。人は神の中に、自分のために善を願い、不可能ささえも成し遂げることのできる天の父を見出します。主イエス・キリストはこう約束されました。「求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見つかります。門をたたきなさい。そうすれば開かれます」(マタイ7:7)

。肉体の癒やし、仕事での助け、家族の絆の強化、子供たちの幸福を願う人もいれば、信仰の強化、祈りの教え、聖霊の授かりを願う人もいます——それぞれが自分の霊的なレベルに応じて願うのです。神は、誠実で熱烈な信仰をもって神に呼びかけるすべての人の祈りを受け入れてくださいます。

祈りは神の助けを私たちにもたらすだけでなく、人の内面の成長を促すという点でも素晴らしいものです。それは、祈りが単なる独り言ではなく、主が魂に答え、聖霊の恵みでそれを照らし出す**対話**だからです。人の内なる世界を照らし出すことで、神は、物質的かつ一時的なものだけでなく、何よりも永遠で真に価値あるものを求めるよう、人を導いてくださいます。祈りの中で神と対話する人は、神が愛に満ちた、至高かつ全能の存在であり、同時に義にかなった、畏敬の念を抱くべきお方であることを自覚します。神を、ある種の盲目的な力のように操ることはできません。神は、従うべき父なのです。このように、当初はこれやあれといった具体的な必要から生まれた個人的な祈りの経験は、人間の**道徳的完成**に寄与し、最高善である天の御国へと導いてくれます。

信仰と神への従順に基づくこのような健全な宗教性とは正反対にあるのが、オカルティズムの不健全な「黒い霊性」である。ここにも超自然的な要素や助けを求める姿勢はあるが、その助けは創造主ではなく、怪しげな霊や神秘的な非物理的な力に求められている。神への健全な信仰が人間を高潔にするのに対し、不健全なオカルト的信仰は人間を霊的に傷つける。それは完全に、地上的で、俗

悪で、罪深いものへと向けられている。オカルト活動的目的は純粹に実利的なものである——秘密を知り、世俗的な成功を収め、誰かの愛を勝ち取り、健康を増進し、バイオエネルギーを吸収し、自分の可能性を広げ、敵に復讐するか、あるいは単に神秘的なものと「遊んで」みたいというだけである。これらすべてが、肉体的な労力を一切要せず、また市民法を犯すことなく達成できるという点に、多くの人々が魅了されている。

神への祈りが人の良心を呼び覚まし、悔い改めと改心を促すのに対し、オカルト活動は逆に、いかなる道徳的義務も課さない。「手に入れて、楽しめ！」というだけだ。この道徳的義務からの一見した自由こそが、おそらくオカルティズムの最大の魅力である。しかし、後で見るように、親切なあの世の霊たちは決して利他主義者ではなく、人間は遅かれ早かれ、受けた恩恵に対して非常に高い代償を払うことになる。ただ、最初はすべてが簡単で単純に見えるだけである。

オカルティズムは、人類そのものと同じくらい古くから存在している。楽園で禁断の果実を口にしたことは、人間がオカルト的な手段によって並外れた知識や能力を得ようとした最初の試みであった（『創世記』第3章参照）。魔術師、シャーマン、死者を呼び出す者などは常に存在してきたが、その大部分は「地下世界」に潜んでいた。私たちの時代において注目すべきは、さまざまな形態のオカルティズムに対する関心と熱狂がますます高まっていることであり、これは一連の真剣な現代の研究によっても裏付けられている。例えば、シカゴ大学の比較宗教学およびオカルティズム分野の学者の一人であるミルチャ・エリアーデは、著書『オカルティズム、魔術、そして文化的流行（*Occultism, Witchcraft and Cultural Fashions*）』の中で次のように述べている。「宗教史家として、私は現代の西洋文化やサブカルチャーにおける魔術の絶大な人気に驚かざるを得ない（ ）。とはいえ

、魔術への熱狂は、より広範な潮流、すなわちあらゆる種類のオカルトや秘教的な科学に対する関心の高まりの一部に過ぎない」(The University Press, Chicago IL 1976)。現在流行している「ニューエイジ」思想の影響を受けて、米国では何千人もの人々が自らをチャネラー(霊媒)やサイキック(予言者)と名乗り、何百万人もの人々が彼らに助言やサービスを求め、彼らの著書に熱中している。そうしたチャネラーの中には、芸術界やテレビ界でよく知られている者もいる。ヨーロッパ、カナダ、ブラジル、ロシア、その他の国々でも、霊界に対する関心の高まりが見られる。オカルト思想の影響は、心理学、医学、哲学、考古学などの本格的な科学分野にまで浸透し始めている。疑似科学やキリスト教の用語を装った古代のオカルト思想を広める、疑似キリスト教のカルトが次々と出現し始めた。書店では、「ニューエイジ」の教えに特化したコーナーが見られる。そこには、「中世の魔女」『古代エジプトの魔術』、『秘密結社の歴史』、『蛇と虹』、『ハイチのシャーマンとゾンビの秘密の言葉』、『古代および禁断の知識の百科事典』、『カバラからアストラル界まで：精神エネルギーと親密な関係の秘密』、「聖なる魔術の書：オカルト知識に欠かせない黒の源泉」、「現代の魔女辞典：人を魅了するために知っておくべきすべて」、「オカルトエネルギーを使って願いを叶える」、「レヴィテーション——その正体と実践法」などである。

アメリカのカルト研究の第一人者であるウォルター・R・マーティン博士は、アメリカ人の60パーセントが何らかの形でオカルトの手法を用いているか、あるいはオカルトに関心を持っていると主張している。オカルト関連の書籍や雑誌を出版する出版社は3,000社以上あり、その総売上高は年間10億ドルに達している。本来はこの分野に関心を寄せない伝統的な雑誌でさえ、オカルトの手法、占星術の兆候、クリスタル療法などに関する記事を掲載している。ロシアでも、オカルトへの熱狂は

流行の域に達している。これらの悲しい事実は、現代社会の精神的退廃を物語っており、キリストの再臨が近づいていることを予兆している。

「オカルティズム」という言葉は、ラテン語の「*occultus*」に由来し、その意味は「隠されたものであり、大多数の人には手の届かないもの」である。オカルティズムの領域には、神秘的で非物理的な力を動かし、さまざまな説明のつかない現象や行為が含まれる。オカルト活動には、次のような目的がある：1) 通常の物理的手段では得られない知識を獲得すること；2) 霊や超自然的な力と接触すること；3) それらの霊や力を操る方法を習得すること。以下に、オカルトの教義や実践の一例を挙げます：プロの占い、占星術、手相占い、数秘術、神智学（ブラヴァツキー協会）、カバラ、人智学、スピリチュアリズム、アストラル旅行、一部の神秘主義、超越瞑想、霊媒術またはチャネリング、ヨガ、超感覚的（非伝統的）治療、バイオフィールド療法、儀式的コーディング、シャーマニズム、魔術、あらゆる種類の白魔術および黒魔術。

現代では、多くのより古いオカルト思想を吸収したオカルト思想「ニューエイジ」が大きな人気を博している。現代のいくつかのカルト教団は、霊からの「啓示」によって生まれたか、あるいはオカルトの要素を含み、オカルト的手法を用いている。その中には、ローゼンクロイツ教団、レリヒの教え（「生ける倫理」または「アグニ・ヨガ」）、ホワイト・ブラザーズ協会、E・ブラヴァツキー協会、「ニューエイジ」運動、オウム真理教、クリシュナ教、ルシウス・トラスト（アリス・ベリリー）、エックアンカー（ポール・ツイチェル）、ザ・チルドレン・オブ・ゴッド（デビッド・バーク）、統一教会（文鮮明）、人智学協会（ルドルフ・シュタイナー）、アスタラ（アーリーン・チ

エイニー）、モルモン教（ジョセフ・スミスとその「天使モロナイ」）、クリスチャン・サイエンス（メアリー・ベイカー・エディ）などが挙げられる。

20世紀の教養ある人々を、霊を呼び出すといった非科学的かつ疑わしい行為に駆り立てるものは何だろうか。この問いに対する答えは、科学や唯物論の教えだけでは、人間のより高次の欲求を満たすことはできないという点にある。 私たち一人ひとりの内には、より高次で精神的なものを求め、次のような根本的な問いへの答えを渴望する何かがある。「私たちは何のために生きているのか」「他の世界や、より完全な存在形態は存在するのか」「死の向こうには何が待っているのか」「人間が物理法則を乗り越え、確固たる幸福を手に入れるのを助けることのできる非物理的な力は存在するのか」。そこで人々は、キリスト教の教えを知らないか、あるいは無視して、秘教的な教えに目を向けるようになる。これらの教えは、存在に関する深遠で根本的な問いに答え、非物理的な力への道を開くと主張している。しかし、その答えは偽りであり、その方法は有害である。最も恐ろしいのは、それらが人間の中から神への恐れや、自らの行いに対する責任感を押し殺してしまうことです。墮落した霊たちは、オカルトの初心者に、「神の裁きも永遠の苦しみも存在せず、それどころか、あちらの世界はすべてが楽で快適だ」と吹き込みます。「だから、知識を蓄え、与えられる力を吸収しなさい」と。そして実際、オカルトの修行の結果、時には人間にテレパシー、透視能力、「バイオフィールドによる治療」能力、あるいは遠隔で物体を動かす能力（テレキネシス）など、並外れた能力が開花することがある。しかし、これから見ていくように、これらの能力は本人自身の力だけで発達したのではなく、**不浄な霊の助力によって得られたものであり**、それゆえに非常に危険で有害なのです。確かに、世間知らずの初心者を怖がらせないよう、悪霊たちは巧妙に自らの存在を隠

し、次のように偽装する。a) 無害な彷徨う霊として、あるいはb) 宇宙に満ちている、あるいは人間そのものに潜む、非人格的な非物質的エネルギーとして。これらのオカルティストたちの考えが、どれほど現実に即しているかを検討してみよう。

### a) オカルト的な精霊の本質

霊との交信は、スピリチュアリズムか、あるいは霊媒術を通じて行われる。霊を呼び出す行為（スピリチュアリズム）の歴史は、遙か古代にまで遡る。聖書においても、それは神によって禁じられた罪深い行為として言及されている。「死者を呼び出す者たちに頼ってはならない。また、魔術師のところへ行ってはならない。彼らによって自分を汚してはならない」（レビ記19:31）。「もし、ある者が死者を呼び出す者や魔術師に近づき、彼らに従って迷い歩くならば、わたしは、その者に顔を向け、その者をその民の中から断ち切る」（レビ記 20:6、20:27）。交霊会では、霊は幽霊の姿で現れるか、あるいは様々な物体に作用することで現れます。例えば、小皿を動かしたり、テーブルを叩いたり、振り子（ウィジャボード）を揺らしたりするなどです。霊媒セッションでは、トランス状態にある霊媒師が自分の体を霊に委ねる。霊は人間に取り憑き、その器官を支配して、霊媒師を通じて様々な行動を行い、様々な啓示を伝える。現代の「ニューエイジ」思想は、まさにこの第二の霊（あるいは「力」）との交信方法を広めており、それを「チャネリング」（channel — 英語では「導く」の意）と呼んでいる。霊媒（チャネラー）がトランス状態に陥るにつれて、顔や唇の筋肉が不随意にピクピクと動き始める。霊が霊媒を完全に支配すると、呼吸のリズムに変化が生じ、表情は時に見分けがつかないほどに変わる。声も変化し、例えば女性の声が男性の低音で響き始めることもある。トランス状態から覚めると、その人は自分に何が起こっていたのか、あるいは霊媒状態の間に

何を話していたのかを思い出せない。当初、霊はメディアムの同意なしに憑依することをためらうため、メディアム自身が霊を招き入れる必要がある。しかし、霊媒セッションを繰り返すうちに、霊の憑依は不随意かつ自発的なものとなり、メディアムはその霊の支配下に入るようになる。

スピリチュアリストや霊媒の中には、間違いなく多くのペテン師が存在する。しかし、実際にあの世の存在と交信し、他の人々には得られない情報や能力を彼らから得ているプロフェッショナルも少なからず存在する。大多数の一般のチャネラーやスピリチュアリストは、自分たちが信頼を寄せている存在がいかに**狡猾で危険であるか**、全く気づいていない。それらは決して無害なさまよう魂でもなければ、無個性な自然の力でもない。それどころか、多くのプロの霊媒やシャーマンの証言によれば、彼らに関わった霊たちは、**意図的に**彼らを欺いていた。彼らは、彼らを支配し、害を与える目的で、善良なふりをしていたのである。例えば、オカルティストでありヒンドゥー教のグル（師）であるシュリ・オーロピンドの弟子であるサットプレムは、次のように記している。「すべてのオカルティストは、霊が望むあらゆる形をとることができることを知っている」（サットプレム『シュリ・オーロピンド、あるいは意識の冒険』、ニューヨーク、ハーパー・アンド・ロウ、1974年）

ロバート・モンローは、ある「アストラル」旅行中に、悪霊たちによる厚かましい執拗な攻撃を受けた出来事を鮮やかに描写している。闘いの最も激しかった瞬間、霊のうちの2体が突然、彼の最愛の2人の娘の姿をとった。その変化はあまりにも突然で、あまりにも本物そっくりだったため、

ロバートは抵抗する力を失い、危うく命を落とすところだった（『*Journeys out of the Body*』、ガーデンシティ、NY、アンカー・ブックス、1973年）。

霊との交信に生涯を捧げ、オカルティズムの分野において多くの者から真摯な専門家として認められている著名な霊媒エマヌエル・スウェデンボリは、スピリチュアリストや霊媒が交信する霊たちは極めて狡猾で虚偽に満ちており、彼らに接する人間が彼らの真の正体や目的を見極めることは不可能であると証言している。これらの霊は、死者の魂に化ける優れた役者である。スウェーデンボリは、オカルトの初心者に次のように警告している。「これらの霊が何かを語っても、決して信じてはならない。なぜなら、彼らはすべてをでっち上げ、絶えず嘘をついているからだ……しかも、彼らは驚くほど堂々と、厚かましく振る舞うため、人は完全に混乱してしまう。そして、もし人が彼らの主張を少しでも信じてしまうと、霊たちは極めて厚かましく新たな虚構をでっち上げ、その人を完全に混乱させてしまう。したがって、誰もが霊に警戒し、彼らを微塵も信じてはならない」（『*真のキリスト教*』、ニューヨーク、E.P.ダットン、1936年）。

同様の証言は、テレパシーによってスプーンやナイフを曲げる能力で知られるウリ・ゲラーからも聞かれる。彼と彼の師である超心理学者アンドリヤ・プハリッチ医学博士は、霊と交信する際、その振る舞いに奇妙で不審な点を見出し、しばしば不安な感覚を抱いていた。この二人のオカルティストは、霊たちがまるで彼らをからかっているかのように、非常に曖昧な振る舞いをしていることを何度も実感した（アンドリヤ・プハリッチ、『*ウリ*』、ニューヨーク、バンタム、1975年）。同様の不安感を、他のプロのスピリチュアリストや霊媒たちも感じていた。

さて、もしオカルティストたちの霊が嘘をついているのなら、彼らが善き天使でも神の僕でもないことは明らかではないか。彼らは死者の魂であるはずもない。なぜなら、聖書によれば、魂が勝手にこの世をさまようことは許されていないからだ。それどころか、人が死んだ後、神はその魂に、樂園か地獄かという特定の場所を定め、魂は最後の審判の日までそこに留まらなければならない（「人は一度死ぬことが定められており、その後、審判がある」ヨハネ9:27）。したがって、オカルティストたちが扱う霊が天使でも死者の魂でもないならば、それらは、救い主が「彼は偽りであり、偽りの父である」と述べた者、すなわち悪魔（ヨハネ8:44）に従属する霊である可能性が最も高い。したがって、スピリチュアリストやチャネラーたちは、あの世の霊を信賴することで、自分自身や他者を大きな危険にさらしている（これについては後ほど詳しく説明する）。見知らぬ他人には決して信賴を置かないような人々が、何も知らない上、しばしば嘘をついているあの世の存在を、なぜこれほど無邪気に信賴するのか、理解に苦しむ。

## **b) 霊的なエネルギーは非人格的なものか？**

次に、現代で広く支持されている第二の説、すなわちオカルト的な手法が、宇宙に満ちている、あるいは自分自身の中に隠されている非物質的なエネルギーを動員するという説について考察しよう。この説は、個人的な神も霊界も認めない現代の懐疑論者にとって、とりわけ魅力的なものである。そのような傲慢な者の意識をくすぐるのは、自分の願望一つで強力な非物質的なエネルギーを動かし、それを自分のために働かせることができるという考えである。非人格的な非物理的な力の存在という前提に基づき、一連の現代オカルト理論が生まれた。それらは疑似科学的な用語をまとめて、あらゆる生活場面で役立つレシピとして読者に提示されている。

こうした現代のオカルト思想がこれほど大きな成功を収めているのは、探求心はあるものの精神的に未熟な人々の目に、それらがあたかも新しい世界を切り開くかのように映るからである。それまで神秘的で不可能と思われていたことが、突然、説明可能で手の届くものとなるのだ。恐れることも、誰を恐れる必要もない——非物理的な力を操ることを学んだ者にとっては、すべてが単純で実現可能なものとなるのだ。

注：オカルティズムの中でも、人間自身の**内なる**エネルギー源を開花させる方法を謳う一派は、精神の健康にとって特に危険である（A. クリゾフスキー『新時代の世界観の基礎』）。この教えによれば、特別な手法を習得した人は誰でも、外の世界と内なる世界の多角的な知覚能力を養い、自分自身や他者の健康を維持・回復させ、あらゆる情報にアクセスする方法を学び、第三の目を開き、アストラル旅行を行い、自身のチャクラを開くことができるようになるという。精神エネルギーを解放することを目的とした特別な手法によるチャクラの開花は、無限の可能性を約束している。人間は神々のような存在となり、透視能力、テレパシー、テレキネシスなどを身につけることができる。しかし同時に、この分野の専門家（A. クリゾフスキー）自身も、自身のバイオエネルギーを解き放つことには多くの深刻な結果を招く恐れがあると警告している。このテーマの詳細な考察は、ここで論じている範囲を超える。ただ一点指摘しておきたいのは、チャクラの開花に取り組む人々は、自らの精神を傷つけ、時には取り返しのつかない状態に陥ってしまうということだ。

興味深いことに、現代の疑似科学的なオカルト実験の「舞台裏」で暗躍する霊たち自身は、チャネラーたちが自分たちの労苦を無視し、功績を隠蔽していることに対して、まったく不快に感じていない。それどころか、霊たちは喜んで非人格的な非物理的な力の陰に身を隠している。そうすることで、彼らの主たる目的、すなわち人間を隷属させるという目的をより容易に達成できるからだ。そして

、これは彼らにとって極めて一貫した態度である。なぜなら、彼らの首領である悪魔そのものが、多面的で巧妙なデマゴグだからだ。知的な探求心を持つ人間には、「超自然的な知識を与えてやろう」と言い、「 」と語り、神秘主義的な傾向を持つ人には「存在の秘密を明かしてやろう」と言い、権力を渴望する人には名声と権力を約束し、地上の幸福を求める人には人生のあらゆる恵みを約束する。一方、不信仰者に対しては「私は存在しない、私は作り話だ! 」と吹き込むのだ。

こうして、人間が最も大切にすることでその心を惑わせた後、悪魔は次第に、そしてますますその人を神から遠ざけ、ついには地獄の深淵へと突き落とすのである。人間の思考に順応するその手腕のおかげで、悪魔は多くの現代人を、古代のオカルト的な寓話で惑わし、それらを疑似科学的な用語で包み込むことに成功した。こうして現代では、古代のシャーマニズムや霊媒術の手法を研究し、科学的に説明しようと試みる「超心理学」という独自の学問分野さえ生まれた。

しかし、依然として根本的な疑問が残る。すなわち、非物理的で道徳的に中立なエネルギーは存在するのか、もし存在するなら、その本質はどのようなものなのか、ということである。これらの疑問に答えるためには、あらゆるエネルギーや力——それが物質的であれ精神的であれ——は、必ずそれを生み出す**源**と結びついているという点を考慮しなければならない。例えば、あらゆる物理的エネルギーや場（電磁場、重力場など）は「それ自体」として存在するのではなく、特定の素粒子（光子、重力子など）に由来する。そして、これらの物理的粒子は非人格的であるため、それらが形成する場もまた非人格的であり、したがって道徳的に中立である。同様に、霊的なエネルギー（霊的な力）も「それ自体」として存在するわけではなく、やはり何らかの霊的存在から発せられるものである。そして、霊的存在（天使、人間、悪魔）は**人格を持つ存在**であるため、必然的に、それらから

発せられるエネルギーは、その道徳的状态——善か悪か——によって色づけられる。経験豊富な超能力者はこのことをよく理解しており、そのため道徳的な汚染から身を守ろうとする。

私たちが住む世界では、白と黒のほかに灰色があり、光と闇のほかに半影が存在することが知られている。しかし、真空の空間には半影はなく、完全な光か完全な闇のいずれかしか存在しない。同様に、霊界にも道徳的に曖昧な状態は存在しない。霊（人間と比較して）は単純な存在であり、完全に善であるか（天使）、あるいは完全に悪であるか（悪魔）のいずれかである。これに従い、霊界には天国か地獄という二つの状態しか存在しない。中間的な、中立的な状態はない。これを理解すれば、神や天使から発せられる力（エネルギー）は常に善であり、善へと導くものであるのに対し、悪魔から発せられる力（エネルギー）は常に悪であり、悪へと駆り立てるものであることに同意せざるを得ない。教会の長きにわたる経験がこれを裏付けています。神から発せられる力、すなわち「被造物ではない神聖なエネルギー」（聖グリゴリオス・パラマスの言葉を借りれば）は、魂を照らし、生かす力です。「先生、ここでおあなた様と一緒にいられるのは、私たちにとって良いことです」——ファヴォレ山で神の光に照らされたとき、弟子たちはそう叫んだ（マタイ17:1-13）。

しかし、人間は単純な霊（天使や悪霊）よりもはるかに複雑である。そのため、人間はある期間、道徳的に未定の状態にあり、善と悪の間で揺れ動くことがある。まさに人間の道徳的な二面性と不安定さゆえに、人間の中にある善と悪は互いに打ち消し合い、その結果、その霊的エネルギーは純粋な霊のエネルギーに比べ、弱く、非効率的なものとなる。これは、例えば原子において、負に帯電した電子が原子核の正電荷を打ち消すのと同様である。一方、霊的世界には、道徳的に中立な非物理的な力は存在しない。なぜなら、それらは道徳的に定まった存在——天使や悪魔——から発せられ

ているからである。したがって、人間がこれらの存在から発せられるエネルギーに触れるたびに、善への誘引か、あるいは悪への誘引のいずれかを経験することになる。

注：もちろん、あらゆる種類のエネルギーの源は神である。しかし、墮天使たちは、創造主から与えられた他の賜物と同様に、このエネルギーをも悪へと転用してしまった。

つまり、オカルティストたちは、非物理的なエネルギーの中立性や安全性について誤解している。神もその天使たちも、自分たちが操作されることを許さないため、悪魔たちは喜んでオカルティストたちの元へやってくる。彼らこそが、オカルティストたちに必要なエネルギーを与えているのだ。しかし、彼らがそうするのは決して無償ではない。彼らは、高金利の貸付という形でエネルギーを与えているのだ。魔術師、魔女、サタニスト、そして多くのプロのオカルティストたちはこの事実を認識しているが、それを秘密にしている。根拠のない主張にならないよう、専門家の意見をいくつか紹介しよう。

マイケル・ハーナー教授は、コロンビア大学とイエール大学で講義を行っている。さらに、ニューヨークのニュー・スクール・フォー・ソーシャル・リサーチで人類学を教え、『*The Way of the Shaman*』という著書も執筆している。オカルト分野における彼の研究は、シャーマンの力の主な源泉は精霊界にあるという確信へと彼を導いた。「導きの精霊なしではシャーマンになることは不可能だ。なぜなら、シャーマンには強力なエネルギー源が必要だからである」（ニューヨーク、バンタム、1986年）。

ヒンドゥー教や仏教のグル（師）たちもまた、自分たちの力が精霊界から来ていることを認めている。例えば、インドリーズ・シャーは次のように述べている。「グルはそれ自体、並外れた霊的な力を持っているわけではない。彼らは霊からその力を得ているのだ。グルが持っているのは、集中する能力だけである」（『*Oriental Magic*』、NY、E.P. Dutton、1973年）。『*The Adventures into the Psychic*』という本の中で、長年にわたり超心理現象を研究してきたジェス・シアーンは、次のような観察結果を述べている。「ほぼ例外なく、すべての偉大な霊媒たちは、自分たちがあの世の力の道具であり、その力が自分たちを通して流れていると感じていた。しかし、自分自身の力については、一切を認めようとはしなかった」（NY、シグネット、1982年）。

オカルティストたちが時折、自らの並外れた能力を自慢したくても、実際にはあの世の**霊**が自分たちを通して作用していることを認めざるを得ない場合がある。例えば、東洋および西洋の超能力者・ヒーラーたちを研究した超心理学者のローレンス・ルシャーに言及しつつ、チャールズ・パナティは次のように記している。「彼が研究したヒーラーたちに共通する点があるとすれば、それは、彼らの中の誰も自らの力で癒やしたわけではないという認識である。それどころか、彼ら一人ひとり、まさに『**霊**』が自分を通して作用していることを理解していた。そして、自分自身を霊の受動的な道具として捉えていた。癒やしを行うためには、すべてのヒーラーが事前にトランス状態に入らなければならなかった」（『*Supersenses*』、ガーデンシティ、ニューヨーク、アンカー／ダブルデイ、1976年）。

超感覚的治療に関する最も包括的な研究の一つは、論文集『*Healers and the Healing Process*』に掲載されている。多数の専門家が参加したこの10年間にわたる研究の中で、次のように述べられている。「異常な治癒現象に関するいかなる研究も、研究者を即座に『知性ある霊』（『指導者』、あるいは『制御者』、あるいは『守護者』などと呼ばれる）という概念へと導く。これらの霊はヒーラーの精神に影響を与え、それまでヒーラーが意識的に認識していなかった情報を提供する」（Wheaton, IL. 『*Theosophical Quest*』、1977年）。この研究ではまた、異常な治癒現象は、スピリチュアリズムや霊への信仰が盛んな国々で最も広く見られるという結論も導き出された。このテーマに関するより詳細な情報は、John AnkerbergとJohn Weldonが発行した『*The Facts on the Occult*』および『*The Facts on Spirit Guides*』（Harvest House Publishers、オレゴン州ユージーン、1991年）に載っている。

このように、どのような用語を用いるにせよ、オカルティストたちは**実在する霊**と交信し、そこから情報や非物理的な力を得ていることが明らかになっている。

### c) オカルト活動の結果

すでに、これらの霊が天使でも死者の魂でもなく、おそらくは悪魔であることを示すデータを提示した。しかし、これを完全に確信するためには、彼らとの交わりがどのような結果をもたらすのかを探ってみよう。これは霊的現象を調査する上で最も確実な方法であり、救い主ご自身が次のように指摘されたものである。「**その実によって彼らを見分けることができる……良い木が悪い実を結ぶことはなく、悪い木が良い実を結ぶこともない**」（マタイ7:16）。そしてここで、オカルトに没頭する人々の生活から得られる数多くの事実が、次のことを確信させてくれる。すなわち、a) 霊は、彼ら

と交わる人々を、あらゆる種類の罪や犯罪へと駆り立てること、そして b) 彼らが人々の健康を損ない、人生を台無しにすることである。 実際、オカルトに携わる人々は、しばらくすると精神的な異常を見せ始め、うつ状態に陥り、酒に溺れ、麻薬を乱用するようになる。M・ラマー・キーンは、プロの霊媒たちの間で13年間を過ごした。彼は自身の公の告白の中で次のように記している。「私が直接、あるいは他者を通じて知っていたすべての霊媒は、悲劇的な最期を遂げた。例えば、この分野の先駆者であるフォックス姉妹は、絶望的なアルコール依存症者として生涯を終えた。読心術で名声を博したウィリアム・スレイドは、精神を病み、ミシガン州の精神病院で亡くなった。霊媒のマーガリーもまた、絶望的なアルコール依存症者として亡くなった…… どこを見渡しても、至る所で同じ光景が広がる。霊能者たちは、その哀れな生を、例外なくさらに哀れな死で終えるのだ。私は、この霊能者たちの世界——欺瞞、下品な放蕩、絶え間ない酒宴、麻薬中毒……——に完全に打ちのめされた。（『*The Psychic Mafia*』）

さらに、霊たちは助けようとしている人々をあらゆる手段で苦しめ、それによって自らの邪悪でサディスティックな本性を露わにする。しかし、そのやり方は狡猾だ。時期尚早に犠牲者を怯えさせないように、彼らは徐々に、そして計画的に苦しみ度を強めていくのだ。 オカルトに没頭する人は、過度の神経過敏や体調不良に悩まされ始め、原因不明の事故や様々な不運に見舞われ、時にはパニックのような恐怖に襲われ、自殺を考え始める。 おそらくこれらの不幸を招いているのは霊たちだと気づき、彼らから逃れようとしてオカルト活動を止めようとする、と、霊たちはその獰猛さを三倍にし、さらに大きな不幸の波で彼を押し流し、恐怖に陥れて自分たちの元へ戻らせるように仕向

ける。このように手綱を締めたり緩めたりを繰り返すことで、霊たちは徐々にオカルティストを支配下に置き、最終的には彼を破滅へと追い込むのである。

この観察は、権威ある『*Encyclopedia of Psychic Science*』の著者であるナンドール・フォード博士によっても裏付けられている。「自分の中にある霊媒能力を抑制しようとする試みは、さまざまな病気を引き起こす。しかし、その人がオカルト活動に戻ると、症状は消え去る」(Secaucus, NJ, Citadel, 1974)。著名な超心理学者エドガー・ケイシーは、その顕著な例である。ジョセフ・ミラードは、「彼は事実上、あの世の力による哀れな操り人形に過ぎなかった」と記している(『エドガー・ケイシー：奇跡の謎の男』、コネチカット州グリニッジ、フォーセット、1967年)。元霊媒師のラファエル・ガッソンは、自身の経験から次のように記している。「多くの人々が、霊媒術を探求し始めたことで深刻な被害を受け、そこから抜け出そうとした際には大きな不安に苛まれた。家族が崩壊し、自殺未遂や精神疾患が、この活動に触れた後、その力から解放されようとした人々を襲い始めた。救いを得た者たちは、神の慈悲に感謝するしかない」(『*The Challenging Counterfeit*』、ニュージャージー州プレインフィールド、ロゴス社、1966年)。

スピリチュアル指導者であり、国連顧問でもあるスリ・チンモイは、次のように述べている。「数え切れないほどの魔術師や霊と交信する人々が、窒息死するか、あるいは殺害された。私がこれを知っているのは、個人的にいくつかの同様の事例に遭遇したからだ」(『*Astrology, the Supernatural and the Beyond*』、ジャマイカ、NY、Angi Press, 1973)。45年間にわたり異常現象の研究に没頭して

きたクルト・コッホ教授は、「オカルトに携わる人々の間では、自殺、悲劇的な事故、精神異常の割合が極めて高い」と証言している。彼やパラサイコロジー分野の多くの専門家は、長年にわたるオカルトへの没頭が、必ずや人の肉体的健康を破壊すると主張している。まるで、ある種の内なる吸血鬼がオカルト実践者から力を吸い取っているかのようだ。

人々がオカルティズムの罠に陥るのは、当初はその危険性に気づかず、むしろすべてが素晴らしく、心地よいものに見えるからだ。マラキン・マーティンは著書『*Hostage to the Devil*』の中で、宗教や超心理学に強い関心を持っていた、物理学と心理学の学位を持つある「カール」という人物の運命を描いている。カールは、その並外れた超能力で知人たちを驚かせていた。自身の「天職」に従い、彼は輪廻転生やアストラル旅行の教えを真剣に研究していた。これらのオカルト科学を深く理解するにつれ、彼の前には次々と新たな地平が開けていった。カールは聡明で慎重だった。彼は、自身の研究が科学と人類に利益をもたらすと確信していた。米国の某大学で教授職に就いた後も、彼は超心理学や神秘現象の分野で実験を続けていた。しかし、次第に彼は自身の性格や気質にいくつかの否定的な変化が生じていることに気づき始める。やがて、交流していた霊たちに対する不信感、さらには恐怖さえもが彼を悩ませるようになった。そしてカールは、自身の研究手法を根本から変え、当初の仮説を放棄する必要があるという確信に至った。しかし、その矢先、彼は麻痺に襲われ、「植物状態」で病院に搬送される。親族や知人たちの祈りに支えられた集中治療を経て、11ヶ月後、カールはようやく回復する。退院後、彼は超心理学の分野における自身のすべての成果を否定し、自身の病気の秘密を明かした。「私は厳粛かつ自発的に、悪霊に身を委ねてしまった。その霊は、私

を助け、私を向上させると約束して善なる存在を装っていたが、私は最初から、直感的にそれが悪霊であることを理解していた。」

それにもかかわらず、何万人もの人々がオカルト活動によって被害を受け、オカルトの危険性に関する実証的なデータがこれほど多く存在するにもかかわらず、多くの人々は、オカルトとは「無害なペテン」であるか、「無邪気な気晴らし」であるか、あるいは「前向きな精神的探求」であるかのような神話を依然として信じ続けている。それは、そのどれでもなく、第三の何ものでもない。また、「危険な」形態のほかに「安全な」形態のオカルティズムが存在するという見解も誤りである。中には、ある程度の注意を払えば、オカルティズムから利益を得られると期待する者もいる。残念ながら、あらゆるデータが示すところによれば、いかなる形態のオカルト活動においても、否定的で破壊的な何かが人間に「まとわりつき」、それから天からの助けなしには逃れることができない。この異界の存在は人間の運命を操り始め、その人をオカルトの泥沼へとますます深く、深く突き落としていく。これはエイズという病気と似たような現象です。このウイルスは体内に侵入すると、健康な細胞に対して「仲間」であり安全であるかのように装って騙します。細胞は防御機構を解き、ウイルスはまるで「トロイの木馬」のように細胞内に侵入します。細胞内部に入って初めて、ウイルスはその破壊的な力を発揮するのです。確かに、人は感染後も数年間は比較的普通の生活を送り、自分の命が尽きようとしていることなど気づかないかもしれない。病気の末期になって初めて、この万物を滅ぼすウイルスの存在が明らかになる。しかし、その時にはすでに手遅れである。

オカルティズムに関する科学研究ではめったに言及されないが、極めて重要であり、オカルト的な霊の本質的な神敵的な性質を明らかにするもう一つの重要な要素がある。それは、人が神やあら

ゆる神聖なものから助けやバイオチャージを受けた後に感じる、説明のつかない神や神聖なものへの嫌悪感である。信仰を持つ人にとっては、精神的な気分の急激な変化が特に顕著に感じられる。超能力者やオカルティストから何らかの助けを受けるとすぐに、祈ったり、聖書を読んだり、教会に行ったりといったあらゆる意欲が失われてしまう。しかも、この嫌悪感は、オカルト的な手段によって得られた力の強さに正比例する。オカルトに繰り返し頼ることは、人を神に敵対する姿勢へと導く。

クルト・E・コッホは次のような事例を語っている。タイのある村に、地元の農民で、所属するキリスト教会の熱心な信徒である男性が住んでいた。ある日、彼は何らかの理由で手を傷つけ、その部分に化膿した傷ができた。熱帯気候のため、炎症は急速に広がり、やがて手の一部が大きな暗赤色、ほぼ黒に近い斑点で覆われてしまった。しかし、最寄りの医師のいる場所までかなり遠かったため、この農民は家庭薬で手を治そうと試みた。ついに、壊疽が肩まで達しそうになったとき、彼は医師のもとへ向かった。医師は、早急に手を切断しなければ、まもなく壊疽で死んでしまうと告げた。タイ人男性はパニックに陥り、「でも、片手だけではどうすればいいんだ？ 誰が私の代わりに稲を植え、収穫してくれるんだ？」と叫んだ。タイ人男性は恐ろしい動揺に襲われた。その時、彼はある老いたヒンドゥー教徒のことを思い出した。その男は、ある種の神秘的な力で人々を癒していたのだ。キリスト教徒は呪術師に頼ってはならないと知っていたが、絶望的な状況に追い込まれた彼は、それでもそのヒンドゥー教徒に助けを求めることにした。ところが、そのヒンドゥー教徒は決してペテン師ではなく、彼の魔術的な力は不可能を可能にした。化膿性炎症は食い止められ、手は救われた。しかし、魔術師から助けを得て間もなく、そのタイ人は教会に通うのをやめ、先祖の異教の信

仰に戻ってしまった。こうして彼は、手を救う代償として自らの魂を売り渡したのだ（『Occult Bondage and Deliverance』、Kregel Publications、ミシガン州グランドラピッズ、1970年）。

少し先で、K. Koch教授は、自分がこれまで出会った中で最も強力な呪術師は、エスキモーのシャーマンであるアルアルクであったと語っている。彼のオカルト的な力は非常に強大で、数人の亡くなった異教徒を蘇らせることさえできた。そのうちの1人は、蘇生後さらに10年間生き延びた。しかし、このシャーマンは、ある伝道者から教えを受けたことでキリストを信じ、洗礼を受けた。その後、彼はすべての魔術的力を失った。コッホが、どのような力で奇跡を行っていたのかと尋ねると、元シャーマンは断固としてこう答えた。「もちろん、悪魔の力だ！」さらに彼は、その力は確固たる信仰を持つキリスト教徒には決して及ばなかったと付け加えた。

現代において、オカルティズムの危険性が高まっているのは、それが宗教的、さらにはキリスト教的な活動として提唱されているためである。伝統的に、あらゆる種類のオカルティズムは、キリスト教に対する敵対的な姿勢を隠そうとはしなかった。しかし今日では、超能力者やその他のオカルティストから、「洗礼を受けなさい」「教会に立ち寄れ」「聖体拝領をしなさい」「聖水を飲め」といった助言を耳にすることがある。一部の超能力者は、セッションの中で神の御名を呼び、祈りを捧げ、十字を切るなどして、自分たちを通して神の力が働いているかのような印象を与えさえする。これらはすべて恐ろしい欺瞞である！いかなる種類のオカルティズムも、どのような装いをまとうとも、その本質において**反宗教的**である。

実際、現代の「キリスト教化された」超能力セッションには、オカルティズムの主要な特徴がすべて現れています。それは、私利私欲のために超自然的な力を操ろうとする試みです。宗教は、創

造主への服従、信仰、悔い改め、道徳的な改心、天国への志向、そして利己的でない善への奉仕を要求する。一方、ここでの目的は、「明るいエネルギー」を吸収し、世俗的な成功を収め、秘密を知ることなどであり——これらすべてが、神に対する道徳的義務なしに行われる。オカルトに携わる人は、教会に行く際、そこでキリストを求めるのではなく、生体場の力を求めている。アイコンを見つめても、神を見るのではなく、エネルギーの源として見ている。彼は、自分の不浄な行いのために「エネルギーを充電」しようと、傲慢にも聖なる品々に手を伸ばし、それによって創造主の威厳を冒瀆している。

では、超能力者たちは自分自身について何と言っているのだろうか？「私は四代続く呪術師だ」と題されたユーリー・タラソフ氏との対談を参照してみよう。記者の「あなたが、バイオフィールド、手技療法、心理療法を用いて、骨軟骨症の患者に呪術をかけたと伺いました。これらは広く知られています。非伝統医療の代表者の中には、ジュナやカシュピロフスキーといった人物もいますが……あなたは『三つの顔を持つ唯一の存在』なののでしょうか？ 一体、その『魔術』とは何なののでしょうか？」という質問に対し、タラソフ氏は次のように答えました。「あなたの質問の中に答えが含まれています。なぜ私が自分を超能力者とは呼ばないのか？ それは、超能力者ができることは、平均的な魔術師が持つ能力の約10分の1に過ぎないからです。催眠術師、民間療法師、心理療法士についても同じことが言えます……これらの分野はいずれも、氷山の一角に過ぎないのです。」極めて率直な言葉だった。その「氷山の一角」の根元は、冥界へと続いている。

あらゆる種類のオカルト行為は**神に敵対する性質を持つ**ため、聖書はそれらを行うことを厳しく禁じている。ここにいくつかの聖句を引用しよう。「あなたのうちには、占い師、予言者、魔術師、

呪術師、魅惑者、霊を呼び出す者、魔術師、死者に問いかける者があってはならない。これらを行う者はすべて、主の御前に忌まわしいからである」（申命記 18:10-13）。「もし、あなたのうちから預言者や夢を見る者が現れ、あなたにするしや奇跡を示し、そのするしや奇跡が実現し、さらにこう言ったとしても：『あなたが知らない他の神々の後について行き、それらに仕えよう』と言うなら、その預言者や夢見者の言葉に耳を傾けてはならない。これは、あなたがたの神、主が、あなたがたが心を尽くして主を愛しているかどうかを試みられるためである…… その預言者や夢を見る者は、あなたがたを主なる神から離れさせようと誘惑した罪により、死刑に処さなければならない」（申命記 13:1-5）。

このように、健全な宗教生活は人を啓発し、道徳的に高めてくれる一方で、不健全な疑似宗教的なオカルト活動は、人を道徳的に傷つけ、破滅へと導く。あらゆる種類のオカルティズムは、必ず墮落した霊との交わりへとつながる。そして、当初はこうした行為が事業において成功をもたらし、人の前に無限の可能性が開かれるかのような印象を与えるものの、最終的には、人は墮落した霊から受けた恩恵に対して、非常に高い代償を払わなければならないことになる。「人が全世界を手に入れても、自分の魂を損なうなら、何の益があるだろうか。あるいは、人は自分の魂と引き換えに、どのような代価を払うことができるだろうか。」（マタイ 16:26）。

## 悪霊からの防護策。

墮落した霊たちがどれほど獐狂で狡猾であり、人間を誘惑し、あらゆる悪をまき散らすことにどれほど執拗で創意に富んでいるか、人間には想像し難い。しかし、それにもかかわらず、人間は至高者の

庇護の下にあるため、墮落した霊たちは勝手に誰かに害を及ぼすことはできない。人が罪深い生き方によって神から遠ざかり、不信仰と情欲の闇に沈むときのみ、その人は墮落した霊たちの影響下に置かれ、彼らに支配されてしまうのである。不信仰者や罪人たちは、悪魔が人間社会に誘惑と悪を広め、自らの闇の王国を確立するために利用する「材料」、すなわち「軍勢」である。その王国は、荒れ狂う海のように、あらゆる方向から私たちを取り囲み、私たちの救いを脅かしている。

これに対抗して、主イエス・キリストは地上に御自身の光の王国——教会——を築かれました。そこでは、信者は静かな安息の地、確かな避難所、そして悪霊からの守りを見出すのです。実際、洗礼の秘跡の際、教会への入会そのものが、司祭が洗礼を受ける準備をしている者（求道者）に対して唱える特別な祈りの言葉によって行われます。

「おお、存在そのものであり、主なる御方よ。この御使いを、敵の奴隷状態から解放し、御自身の天の御国にお迎えください……彼の人生を、明るい天使と結び合わせ、敵のあらゆる策略、悪しき者との出会い、正午の悪魔、そして邪悪な妄想から彼を救い出してください。彼の心に潜み、巣くうあらゆる悪しき霊、不浄な霊——惑わしの霊、欺きの霊、偶像崇拜の霊、あらゆる情欲の霊、偽りの霊、そしてあらゆる不浄の霊——すなわち、悪魔の唆しによって働くすべてのものを、彼から追い出してください。そして、あなたのしもべを、あなたのキリストの聖なる群れの言葉による羊とし、あなたの教会の誠実な一員とし、聖別された器とし、光の子とし、あなたの御国の相続人としてください。」

その後、水に三度浸されることによって、新しく洗礼を受けた者は、悪魔に侵入を許していた罪の汚れから清められ、明るい衣のように彼を四方から覆う神の恵みを身にまとう（ペトロの手紙一 2:9；コロサイ1:12-13）。この瞬間から、教会の新しい一員は、救い主の象徴的な姿に倣って、羊の囲いの中に入る。そこを、善き羊飼いである主が、貪欲な狼——悪魔やその他の墮落した霊たち——から注意深く守っておられるのである。救い主はこれについてこう言われた。「わたしは彼ら（信者たち）に永遠の命を与える。彼らは決して滅びることがなく、だれもわたしの手から彼らを奪い去ることはできない」（ヨハネ10:1-16, 28）。したがって、洗礼を受けた者が主の保護の下にとどまるために必要なことは、罪を避け、受けた聖霊の恵みを保つことだけです。

しかし、悪魔は教会の新しい一員へのアクセスを失うと、再びその人に影響を及ぼす新たな方法を模索し始めます。悪魔は、その常套手段である「誘惑」を用いて、これを成し遂げようとします。もちろん、クリスチャンは誘惑を退けるために必要なすべての手段を神から与えられているが、もし彼が気を緩めて肉的な生活を送り、罪を犯し始めれば、悪魔は再び彼に近づき、さらに残酷な方法で彼を奴隷化し始める。これについて、主イエス・キリストはこう言われました。「汚れた霊が人から出て行くと、水のない場所をさまよい、安らぎを求めても、見つけれられない。そこで、『出て行った家に帰ろう』と言う。戻ってみると、その家は空いていて、掃除され、整えられている。そこで、自分よりもさらに邪悪な七つの霊を連れて来て、そこに入り込み、住み着く。そうして、その人の最後の状態は、最初よりもさらに悪くなるのである」（マタイ12:43-45）。この危険について警告しつつ、聖書は私たちに警戒するよう呼びかけている。「立っていると思う者は、倒れないように気を

つけなさい」（Iコリント10:12）。使徒パウロは、クリスチャンは戦いの最前線に立つキリストの戦士であると自覚すべきだと教えている。

「兄弟たちよ」と彼は呼びかけます。「主と、その力の強さによって強められなさい。悪魔の策略に対抗できるよう、神の全武装を身に着けなさい。なぜなら、私たちの戦いは、血肉に対するものではなく、支配者たち、権威者たち、この世の闇の支配者たち、天上の悪の霊たちに対するものだからです。それゆえ、神の全武装を身に着けなさい。そうすれば、悪の日に立ち向かい、すべてに打ち勝って、堅く立つことができるのです」（エペソ6:10-13）。

主イエス・キリストは、神の恵みを私たちに引き寄せ、悪霊を退けるための数々の手段をもって、私たちを武装させてくださいました。これには、第一に、**祈りとキリストの御名の呼び求め**が含まれます。私たちは毎日、天の父に「私たちを誘惑に遭わせないでください。悪者（悪魔）から救い出してください」と祈るように教えられています。朝や夕方の祈りなど、多くの祈りには、悪魔の策略から守られるよう願う内容が盛り込まれています（祈祷書を参照）。この章の最後には、悪霊に対するいくつかの特別な祈りが掲載されています。主はご自身の御名の力について、「わたしの名によって、あなたがたは悪霊を追い出すであろう」（マルコ16:19）と語られました。聖書や聖人の伝記には、悪霊を追い出す際におけるキリストの御名の効力を示す無数の例が記されています。

長きにわたる教会の経験は、悪魔たちが聖なる**十字架の像や十字の印**に抗うことはできないことを確信させてくれます。それらは、彼らにとって、まるで昆虫にとっての火のようなものです。聖二

キタ・スキファトはこのテーマについて次のように述べています： 「悪霊たちはしばしば心の平穏を乱し、眠りを奪うが、勇気ある魂は、ただ一つの命を与える十字架の像とイエス・キリストの御名の呼びかけによって、神の助けを借りて、彼らの幻影を打ち砕き、彼ら自身を逃亡へと追い返すのである」（『慈愛』第2巻、118ページ）。同様に、聖ヨハネス・クラマトリオスも次のように説明している。「単に指で十字架を描くのではなく、心の準備と完全な信仰をもって描かなければならない。もしそのように自分の顔に十字架を描けば、不浄な霊は、自らを貫き致命傷を負わせたその剣を見て、誰一人としてあなたに近づくことはできないだろう。なぜなら、私たちが犯罪者の処刑場を見て戦慄を覚えるならば、キリストが彼らのすべての力を打ち砕き、蛇の頭を切り落としたその武器を見て、悪魔たちがどれほど恐怖に震えるか想像してみてほしい。十字架が私たちと共にあるとき、悪魔たちはもはや恐ろしくもなく、危険でもありません」（『福音書に関する談話』第2部、第5版、432-433ページ）。太古の昔から、キリスト教徒が首にかける十字架を身につける習慣が定着してきました。

また、**自分の住居を清めることも重要です**。引っ越してきた家が、以前の住人によって穢されていることがあります。彼らが罪深い生活を送ったり、汚い言葉を吐いたり、騒々しい音楽や不道德な映画にふけったり、あるいはオカルトに没頭していた場合などです。殺人や自殺が起きた住居には、悪霊が宿ることが珍しくありません。住居を清めるには、適切な祈りを唱えながら聖水を振りかける（下記参照）か、さらに良いのは司祭を招いて住居の聖別をしてもらうことです。

一般的に、悪魔は**罪に引き寄せられる**ということを知っておく必要があります。もし罪を犯して心から悔い改めなければ、悪魔が私たちに近づいてくる隙を与えてしまいます。罪深い状態とは、まるでトンネルのようなもので、悪魔たちはそこを通過して私たちの潜在意識に侵入し、私たちに影響を及ぼすのです。したがって、その影響から解放されるためには、誠実な**悔い改めと告白**によって自らを清め、その後、畏敬の念を持ってキリストの聖なる秘跡に**与るべきです**。そうすれば、私たちの内に入られた主は、すべてを焼き尽くす火のように、あらゆる汚れを根絶やしにし、闇の霊たちが私たちに近づく道を断ち切ってください。少なくとも月に一度は定期的に聖体拝領を行う習慣を身につけることが大切です。そうすれば、私たちは常に神の恵みの炎を自分の中に宿すことができるでしょう。初期のキリスト教徒たちは、毎週日曜日に聖体拝領を行っていました。

主イエス・キリストが、私たちの救いと御恵みを引き寄せるために与えてくださったこれらすべての手段は、魔法の呪文としてではなく、信仰を強め、徳ある生活を送るために与えられた神の慈しみの**導き手**として捉えるべきです。

以下に、不浄な霊に対する祈りをいくつか挙げます。

### 命を与える十字架へのトロパリオ

主よ、あなたの民を救い、あなたの御国を祝福してください。正教徒のキリスト教徒に敵に対する勝利を授け、あなたの十字架によってあなたの民の住まいを守り抜いてください。

主よ、あなたの民を救い、あなたの御業を祝福してください。正教徒のキリスト教徒に敵に対する勝利を授け、あなたの御十字架をもって、あなたに属する者たちを守り抜いてください。

## 聖十字架への祈り

(就寝前に唱える)

神よ、復活し、御敵を打ち砕き、御顔を憎む者たちを御顔から逃げ去らせてください。煙が消え去るように、彼らも消え去り、火の御顔から蠟が溶けるように、神を愛し、十字架の印を自らに描く者たちの御顔から、悪魔たちが滅び去りますように。喜びなさい、至聖にして命を与える主の十字架よ。あなたの上に十字架につけられたキリストの力によって悪魔を追い払い、地獄に下って悪魔の力を打ち砕き、あらゆる敵を追い払うために、私たちにその尊い十字架を与えてくださった主の十字架よ。栄光に満ち、命を与える主の十字架よ、聖なる御母マリアとすべての聖人たちと共に、永遠に私を助けてください。アーメン。

## 詩編第90篇

至高者の助けによって生きる者は、天の神の御庇護の下に安らぐ。主に向かってこう言う。「あなたは私の守り、私の避難所、私の神。私はあなたに信頼を置きます。」主は、罌を仕掛ける者の網や、反逆の言葉からあなたを救い出される。御自身の肩であなたを守り、その翼の下であなたは安らぐ。御自身の真実が盾となってあなたを護る。夜の恐怖も、昼に飛ぶ矢も、暗闇を彷徨う疫病も、真昼に荒廃をもたらす疫病も、恐れることはない。あなたのそばで千人が倒れ、あなたの右で一万人が倒れても、あなたには近づかない。あなたはただ自分の目で見て、罪人たちに下される報いを見るだけである。あなたは言った。「主は私の望みである。」あなたは至高者を自分の避難所として選んだ。災いはあなたに及ばず、疫病もあなたの住まいには近づかない。主は御自身の御使いたちに、あ

あなたのすべての道においてあなたを守れと命じられたからである。彼らはあなたを両手で支え、あなたの足が石につまずくことのないようにする。あなたはアスピドやバシリスクを踏みにじり、獅子や蛇を踏み潰す。彼がわたしに信頼を置いたから、わたしは彼を救い、彼を守り抜く。彼はわたしの御名を知ったからである。彼が苦難にあるとき、わたしは彼と共にいる。彼がわたしを呼び求めれば、わたしは彼の声に耳を傾け、彼を救い、彼を栄光に輝かせ、長い生涯で彼を満たし、わたしの救いを彼に示す。

### 悪魔の策略に対する祈り

主イエス・キリスト、神の子よ、十字架をもって古き蛇を打ち倒し、闇の鎖をもってタルタロスに縛り付けた方よ、その策略から私を守ってください。至聖なる我らの主の母、神の母にして永遠の処女マリア、聖大天使ミカエルおよびすべての天の軍勢、聖預言者にして洗礼者ヨハネ、聖福音記者ヨハネ・神学者、聖殉教者キプリアンおよび殉教者ユスティナ、聖ニコラオス・奇跡行者、聖ニキータ・ノヴゴロドスキー、聖ヨハネ・シャンハイおよびサンフランシスコの奇跡行者……ならびにすべての聖人たちの祈り、命を与える十字架の力、そして守護天使の取り成しによって、私を悪意の霊、悪意ある人々、魔術、呪い、邪眼、そしてあらゆる敵の誹謗中傷から救い出してください。御自身の全能の力によって、私を悪から守り、御光に照らされて、天の御国の静かな安息の地へ無事にたどり着き、そこで、私の救い主である御自身に、御父と、至聖にして命を与える御霊と共に、永遠に感謝を捧げることができますように。アーメン。

付録には、司祭が特別な場合に唱える、さらに二つの呪文的な祈りが掲載されています。

## サタンの王国 燃えるゲヘナの入り口にて

聖書は、世の終わりに先立ち、墮落した霊たちの活動が極めて活発化すると予言しています。その時代、多くの人々は信仰を失い、オカルトに傾倒し、公然と悪魔に仕えるようになるでしょう。滅びゆく人々を憐れみ、主は様々な災いを通じて罪人たちを改心させようと試みられるが、彼らの大半はまるで目も耳も塞がれたかのようになり、「彼らは、自分の殺した者、行なった魔術、犯した淫行、盗んだ物について、悔い改めることはない」（黙示録 9:21）のである。

それは、それまで復活されたキリストの力によって抑えられていたサタンが、神から背を向けた人々を惑わすために、短期間ではあるが一定の自由を得る時となる。『ヨハネの黙示録』第20章では、キリストの復活から世の終わりまでの全期間を、象徴的な数字である「千年間」として表している。使徒ヨハネは預言的な幻の中で、「天から降りてくる天使を見た。その天使は、底知れぬ淵の鍵と、大きな鎖を手にとっていた。彼は、古き蛇である竜、すなわち悪魔でありサタンである者を捕らえ、千年の間、縛り上げた。そして、彼を底知れぬ淵に投げ込み、閉じ込め、封印を施した。それは、千年の期間が満ちるまで、もはや諸国民を惑わさないようにするためである。その後、彼はしばらくの間、解き放たれることになる……そして出てきて、諸国民を惑わす……」（黙示録20:1-8）。教父たちの見解によれば、「竜の縛り」とは、キリストの復活の瞬間を指しており、そのときサタンは、キリストの血によって贖われた罪人たちに対するかつての権威を失い、この世におけるその活動

が制限され、「縛られた」状態となったのである。千年間とは、キリストの復活から、世の終わり前の時代に至るまでの全期間を指す。その時代、サタンは人々が信仰から離反したことを利用して、再び人々に対する権威を得るが——それはごく短い期間に過ぎない。その時、『ヨハネの黙示録』の比喩的な幻視によれば、サタナの使いたちは、まるで地獄のイナゴのように、人々が呼吸する大気そのものを埋め尽くすかのように、すなわち社会生活のあらゆる側面に浸透することになる。「そして、底知れぬ淵の穴から、大きな炉からの煙のような煙が立ち上った。その穴からの煙によって、太陽も空気も暗くなった。そして、その煙の中からイナゴが地上に降りてきて、地上のサソリが持つような権威が彼らに与えられた……そして、彼らの王として、底知れぬ淵の天使〔悪魔〕がいた。その名はヘブライ語でアバドン、ギリシャ語でアポリオン（滅びをもたらす者）である……「地に住む者たちよ、悲しむがよい。悪魔が、自分に残された時間が少ないことを知って、激しい怒りを抱いてあなたがたのところに降りてきたからだ！」（黙示録 9:2-2,11, 12:12）。

できるだけ多くの人々を滅ぼそうと急ぐ悪魔は、そのすべての権威を反キリスト（世界支配者であり、キリスト教の敵）に委ねる。「その出現は、サタンの働きによって、あらゆる権威と、しるしと、偽りの奇跡を伴って行われる」（テサロニケの信徒への手紙第二 2:9）。その主要な手先である偽預言者は、さまざまな偽りの奇跡によって人々を惑わし、「大いなるしるしを行い、人々の目の前で天から地へ火を降らせることさえする」（ヨハネの黙示録 13:13）だろう。もちろん、それらは本物の奇跡ではなく、不浄な霊の助けを借りて行われる、さまざまな洗練された手品に過ぎない（ヨハネの黙示録 16:14）。

それは、信者たちに対する極めて過酷な迫害の時代となるでしょう。人類の不信仰と墮落ゆえに、反キリストは「聖徒たち〔キリストを信じる者たち〕と戦いを繰り広げ、彼らに打ち勝つ」ことを許されるのです（黙示録13:7）。しかし、それはあくまで表面的で、見せかけの成功に過ぎません。教会そのものは、主が約束されたとおり、揺るぎないままである。「わたしはわたしの教会を建てよう。地獄の門も、それを打ち破ることはできない」（マタイ16:18）。反キリストの時代には、教会は単に地下活動に移行するだけである。

しかし、その時代における悪魔の最大の成功こそが、その早急かつ決定的な滅亡を予告することになる。 ついに、古の預言が成就する。「その日、主は、その重く、大きく、強き剣をもって、まっすぐに走るレヴィアタン、うねるレヴィアタンを打ち、海の怪物をつぶす」（イザヤ27:1）。神秘家ヨハネ・テオロゴスは、預言的な幻の中で、「獣〔反キリスト〕が捕らえられ、その前で奇跡を行っていた偽預言者も共に捕らえられた……そして、生きているままの二人は、硫黄の燃える火の池に投げ込まれた……その後……彼らを惑わしていた悪魔は、獣と偽預言者がいる火と硫黄の池に投げ込まれ、昼も夜も、世々限りなく苦しめられる」（黙示録19:20、20:10）。

これこそが、高慢になった明けの星、彼と共に背いた霊たち、そして彼らの陰鬱な王国全体の、完全かつ徹底的な破滅である！彼らがゲヘナに投げ込まれることで、この世におけるあらゆる誘惑、暴力、偽り、そしてあらゆる悪は終わりを告げ、救われた者たちの永遠の至福が始まる。この喜びに満ちた時は近づいているが、私たちはキリストへの献身において特に警戒を怠らず、信仰の炎を燃やし続けなければならない。そうしてこそ、サタンが完全な敗北を目前にして人類に対して放つ誘惑

の奔流に、流されてしまうことを防げるのだ。 「勝利する者には、わたしが勝利して、わたしの父の御座に父と共に座したように、わたしと共にわたしの御座に座らせる」（黙示録 3:21）。

## 結論

つまり、悪魔や悪霊たちは架空の存在ではなく実在するものであり、私たちにとって重大かつ絶え間ない危険をもたらす存在です。彼らはキリストを信じる者たちに対して権威を持つわけではありませんが、人々の罪深さを利用して彼らを奴隷化し、様々な罪へと駆り立てようとします。それゆえ、あらゆる手段を尽くして罪を避け、義にかなった聖なる生活を送るよう努めなければなりません。 墮落した霊たちは、人々を惑わすことに極めて巧みであり、膨大な経験を持っていることを忘れてはならない。 彼らは、私たちを主から引き離し、滅ぼすことに、すべての時間と労力を注いでいます。主は彼らの活動を制限し、その策略から私たちを守ってくださいます。しかし、主は、私たち自身の霊的な益のために、彼らが私たちを誘惑することを許しておられます。それは、私たちが怠けることなく、警戒して生き、霊的に成長するためです。

主イエス・キリストは、悪霊を退けるための強力な手段を私たちに与えてくださいました。それは、御名、祈り、十字架、聖水、そしてとりわけ聖体拝領です。天の御国の安らかな港にたどり着くまで、これらの手段を活用し、善のために生きましょう！ アーメン。

## 悪霊の中傷に対する祈り

### 大天使ミカエルへの祈り、威厳ある軍司令官へ

主なる偉大なる神、始まりなき王よ！ 御自身の大天使ミカエルを、御自分のしもべである私に助けとして遣わし、目に見える敵も目に見えない敵も、私から追い払ってください！

主の大天使ミカエルよ！ 御自分のしもべ（名前）に、恵みの油を注いでください。

主の大天使ミカエルよ、悪魔を打ち砕く者よ！ 私と戦うすべての敵を禁じ、彼らを無力にし、強風が吹き荒れる時の塵のように彼らを散らしてください。主の大天使ミカエルよ、六つの翼を持つ者、天の軍勢——ケルビムとセラフィム——の第一の君主であり、大將軍よ！ おお、驚くべき大天使ミカエルよ！ あらゆる事において、私を助けてください——侮辱、苦しみ、悲しみの中、荒野、岐路、川、そして海の上においても——私の静かな安息の地となってください！ 偉大なる大天使ミカエルよ、罪深い私があなたに祈り、あなたの聖なる御名を呼び求める声を聞かれたら、あらゆる悪魔の誘惑から私を救い出してください。そのとき、私の祈りを聞き入れ、急いで私を助けてください。おお、偉大なる大天使ミカエルよ！ 主の尊き十字架の力によって、私を襲うすべての者を打ち破ってください。至聖なる神の母、聖使徒たち、聖ニコライ・奇跡行者、キリストのために聖なる狂人となった聖アンドレイ、聖預言者エリヤ、聖大殉教者ニキタとエウスタフィオス、尊い教父たち、聖なる主教たち、殉教者たち、そして天の軍勢のすべての聖人たちの祈りによって、私を襲うすべての敵を打ち負かしてください。アーメン。

おお、偉大なる大天使ミカエルよ！ 罪深い私を助けてください。地震、嵐、洪水、火、剣、無益な死、あらゆる悪、人々の悪意、そして不浄な霊たちのあらゆる策略から私を救い出してください、主の偉大なる大天使ミカエルよ、常に、今、そして永遠に、世々限りなく。アーメン。

### 魔術に対する祈り

主イエス・キリスト、神の御子よ、御自身の聖なる天使たち、全き清き我らの主の母、神の母であり永遠の処女マリアの祈り、尊き命を与える十字架の力、御自身の聖なる大天使ミカエルの祈りと、その他の天の無形の御力、御自身の聖なる預言者、先駆者、洗礼者ヨハネ、聖使徒にして福音記者ヨハネ・神学者、聖殉教者キプリアンおよび殉教者ユスティニア、聖ニコラオス、ミル・リキアの奇跡行者大司教、聖レオン、カターニアの司教、聖ニキータ・ノヴゴロドの、聖ヨアサフ・ベルゴロドの、聖ミトロファン・ヴォロネジの、尊者セルギイ・ラドネジの修道院長、尊者ゾシマとサヴァティイ・ソロヴェツキーの、尊者セラフィム・サロフの奇跡行者、聖殉教者ヴェラ、ナデージダ、リュボヴィ、および彼女たちの母ソフィア、聖殉教者トリフォン、聖ヨハネ・シャンハイの奇跡行者、聖なる至福の母クセニア、聖義人ヨハネ・クロンシュタットの奇跡行者、聖なる義人ヨアキムとアンナ、そして御身のすべての聖人たちに——この不肖の私を助け、敵のあらゆる中傷や、あらゆる悪——嫉妬、魔術、妖術、呪術、そして悪意ある人々——から私を救い出し、彼らが私にいかなる悪も及ぼすことのないようにしてください。

主よ、御光の輝きをもって、朝、昼、夕べ、そしてこれから訪れる眠りの間、私をお守りください。御恵みの力によって、悪魔の唆しによって働くあらゆる邪悪な不義を、私から退け、遠ざけてください。もし、私に対して何らかの悪が企てられたり、行われたりしたならば、それを冥界へと返してください。まことに、御国と力と栄光は、父と子と聖霊に属します。アーメン。

### 聖殉教者キプリアンへの祈り

**おお、** 神の聖なる御使い、聖殉教者キプリアンよ、あなたに助けを求めるすべての人々のための、迅速な助け手であり、祈りの仲介者よ！私たち、ふさわしくない者たちからのこの賛美を受け入れてください。主なる神に、私たちのために次のように願い求めてください： 弱さの中に力を、悲しみの中に慰め、そして私たちの生活に必要なすべての恵みを。あなたの力強い祈りを主へと捧げ、私たちを罪の陥落から守り、真の悔い改めを教え、悪魔の束縛や、あらゆる不浄な霊の働きから私たちを救い出し、私たちを傷つける者たちをすべて鎮めてくださいますように。目に見える敵、目に見えない敵すべてに対して、私たちの力強い擁護者となってください。試練の中で忍耐を授けてください。また、私たちが息を引き取るその時には、天上の試練の場において、迫害者たちから私たちを守り導いてください。そして、あなたに導かれて、私たちが天のエルサレムに到達し、そこで天の御国において、すべての聖徒たちと共に、父と子と聖霊の至聖なる御名を、世々限りなく賛美し、讃歌することができるようお導きください。アーメン。

## 悪霊に悩まされている住居に対する司祭の祈り

。主なる神、私たちの救い主、生ける神の御子よ、ケルビムに運ばれ、あらゆる始まり、権威、力、支配よりも高きにおられる方よ！あなたは偉大であり、あなたを取り巻くすべての人々にとって畏れ多いお方です。あなたは、御自身の力によって天をドームのように広げ、地を創造し、知恵をもって宇宙を治めておられるお方です。あなたは地をその場所から動かし、太陽に命じれば、それは昇らず、星々の輝きを制限なさる（ヨブ記9:7）。あなたは海を制し、それを干上がらせられる。あなたの怒りによって岩は砕け散り、すべての支配者や権威は戦慄に襲われる。あなたは青銅の門を打ち碎き、鉄の鎖を断ち切られました。あなたは強者を縛り、その器を奪い取りました。あなたの十字架によって、あなたは迫害者を打ち倒し、受肉という釣り竿で蛇を捕らえ、それを縛り、タルタロスの闇に閉じ込められました。

主よ、あなたを頼るすべての者の堅固な壁であるあなたよ、すべての悪魔の策略、サタンの陰謀、そしてあらゆる敵の誹謗中傷を退け、追い払い、逃亡へと追いやってください。そして、この家の周囲を彷徨う、抑圧し苦しめるすべての霊を、この家から遠ざけてください。あなたの聖なる御名を呼び求め、悪魔にとって恐るべきしるしであるあなたの十字架を身に帯びるすべての人々を守り給え。主よ、あなたは悪魔の軍勢を追い払い、耳が聞こえず口が利けない者を悪魔から解放し、二度と

彼に戻らないよう命じられたからです。 あなたは、私たちの目に見えない敵の陣営を滅ぼし、あなたを信じる者たち、あなたを求める者たちを賢明に導き、彼らにこう言われました。「見よ、わたしはあなたがたに、蛇やサソリ、また敵のあらゆる力に立ち向かう権威を与える。何ものもあなたがたを害することはない」（ルカ10:19）。

主よ、どうかこの家に住むすべての人々を、あらゆる害や誘惑、夜の恐怖、昼に飛来する矢、闇の中を徘徊する疫病、真昼に荒廃をもたらす伝染病から守ってください。 あなたのすべてのしもべたち、女たち、そして幼子たちが、あなたの助けを喜び、天使の軍勢に守られながら、心をつにしめて、あなたにこう歌い上げることができますように。「主は私の助け手。私は恐れない。人が私に何ができるというのか。」そしてまた、「私は悪を恐れない。あなたが私と共におられるから。」

まことに、神よ、あなたは私の支えです。あなたは力強い主、この世の君主、来たるべき世の父であり、あなたの御国は永遠の御国です。私たちは、始まりなき御父と聖霊と共に、今、常に、そして世々限りなく、あなたに栄光を捧げます。アーメン。

### 聖バシレイオスによる悪魔抜きの祈り

#### 悪魔に苦しむ者のために司祭が唱えるもの

神々の神、主たちの主、炎の位階の創造主、無形の力の造り主、天と地上のすべてのものの芸術家よ。あなたを誰も見たことがなく、見ることもできない方、すべての被造物が御前に震えおののく方。かつて高慢になった大天使を、あなたは地上に追放し、彼と共に背いた天使たち——その悪意ゆえに悪魔となった者たち——を、冥界の深淵に閉じ込められました。 御名の威光によって行われるこの呪文を、悪的首領と、彼に味方するすべての霊、そして彼と共に天の光から追放された者たちに対し

て恐るべきものとして働かせ、彼らを退散させ、ここから立ち去るよう命じ、今ここに刻まれる聖なる十字架によって、いかなる害も及ぼさないようにしてください。御命令により、これらの御僕らが、蛇やサソリ、そしてあらゆる敵の勢力に立ち向かうための強さの印を受け取ることができますように。

まことに、あらゆる息吹において、御父と御子と聖霊の御名が、畏れをもって讃えられ、称えられ、栄光が帰せられるからです。今、そして常に、世々限りなく。アーメン。

\*\*\*

\*\*\*

\*\*\*

## エクソシストへの警告

モスクワ神学アカデミー教授アレクセイ・オシポフ氏の論文による。

必要な知識や予防措置を持たない者が危険な感染症を治療してはならないのと同様に、誰も独りよがりにエクソシスト（プロの悪魔祓い師）の役割を引き受けるべきではありません。悪魔は極めて狡猾で復讐心に満ちており、深い信仰と謙遜、そして聖霊の恵みをもって武装していない者が彼らと対決すれば、非常に痛ましい代償を払うことになるかもしれない。

おそらくこの理由から、ラオディキア公会議（364年）は次のように定めた。「司教から権限を与えられていない者は、教会においても、家庭においても、呪文を唱えてはならない」（第26条）。聖ヨハネス・カッシアン・ローマ人は、自称奇跡行者たちに対して次のように警告している。「不浄な霊を支配しようとする者、あるいは病人に奇跡的に健康を与えようとする者、あるいは人々の前

で何らかの驚くべきしるしを示そうとする者は、たとえキリストの御名を呼び求めている、キリストから遠ざかっている。なぜなら、傲慢な高慢さゆえに、謙遜の師に従っていないからである……それゆえ、私たちの先人たちは、呪術師として名声を博そうとした修道士たちを、決して善良であり、虚栄という汚染から自由であるとは呼ばなかった……」[1]

『使徒の規定』（3世紀）は、エクソシストを任命することを禁じており、その理由として、「呪文による栄光ある偉業は、キリストを通じた神の自発的な好意と恵み、聖霊の導きによるものであり、癒しの賜物を受けた者は神からの啓示を通じてそれを示し、その内に宿る恵みはすべての人々に明らかになるからである」と述べている。[2]。

正教会は常に、「この種は、祈りと断食によってのみ追い出される」（マタイ17:21）という救い主の教えに従ってきた。すなわち、正しい修道生活を通じて、キリスト教徒は謙遜を深めるにつれて無情の境地に達し、神から悪霊に打ち勝つ賜物を受けるのである。無情に達した者だけが、病者や自分自身に害を及ぼすことなく、闇の霊たちと公然と戦うことができる。しかし、そのような者は古代においてもごくわずかであった[3]し、現代に至っては言うまでもない。したがって、たとえ最も敬虔な司祭であっても、特別な祈りや聖務（「*ex opere operante*」）によって自ら悪霊を追い出そう（叱責しよう）と試みるならば、自らが悪霊から侮辱を受けるリスクを負うだけでなく、悪霊に取り憑かれた者をさらに大きな病や苦しみへと陥れる危険を冒すことになる。聖霊の賜物を持たない者が、その賜物の働きを装うことは許されない。聖イグナティウスは、こうした試みについて苦々しくこう叫んだ。「魂を滅ぼすような演技であり、最も悲惨な喜劇である——霊的な賜物を持たないにもかかわらず、古代の聖なる長老たちの役割を自ら引き受ける長老たち」[4]。

悪霊を追い出す聖人たちもいたが、それは誰からでも追い出すわけではなく、主ご自身が彼らに指し示された者たちからだけだった。その際、彼らは「単に」祈りによって癒やしを行っていた。その祈りは、大部分が内面的で他者には見えないものであり、外的なものは稀であった（例えば、聖バシレイオス大聖人、聖ヨハネス・クラマトルスの祈りを参照）。また、懺悔、聖体拝領、聖体拝領の秘跡を執り行いましたが、特別な呪文のような儀式の手順は一切行いませんでした[5]。というのも、そのような儀式はすでに洗礼の秘跡の前にすべての信者に対して行われており、サタンとそのすべての行いから意識的に離反するという彼らの行為の一部となっているからです。

この問題に関する聖父たちの発言をいくつか紹介する。

**聖クレメンス・ローマの名で知られる『貞潔について』**という書簡において、修道士たちには「……悪霊に取りつかれた者たちを訪ね、彼らのために祈りを捧げよ。断食と祈りによって、華麗で洗練された言葉ではなく、神から癒しの賜物を受けた者として、彼らを呪い出せ。」

**アッバ・ピティリオン**は「霊の区別について特に力強く論じ、ある悪霊たちは私たちの情欲を監視し、しばしばそれらを悪へと向かわせると語った。それゆえ、子らよ、と彼は私たちに言った、悪霊を追い出したい者は、まず**情欲を征服しなければならない**。なぜなら、どのような情欲を克服したかによって、その者の悪霊を追い出すことになるからだ。これらの情欲の悪魔を追い出すためには、少しずつ情欲を征服していかなければならない」[6]。

**尊者ヨハネス・カッシアヌス・ローマ人の『神の賜物について』**という対話集には、次のような記述がある。「明らかな悪徳に耽っている人間でも、時に驚くべき行いを成し遂げ、それゆえに聖

人であり、神の僕であると崇められることがある…… また、自らに癒しの賜物があると確信する者でさえ、心の高慢に駆られて、最も深刻な転落を経験する。 このことから、悪魔たちは、聖性の資質も霊的な実りもない人々を大声で呼びながら、あたかも彼らの聖性が彼らを焼き尽くし、悪魔に取り憑かれた者たちから逃げ出さざるを得ないかのように見せかけるのである」[7]。

聖バルサヌフィオス大聖人：「自分に何が有益かを知らずに、癒やしを得るために必死に祈るのは良くない」[8]。 同聖人はまた次のように述べている。「悪魔に立ち向かうことは、すべての人にふさわしいことではなく、神にあって強く、悪霊たちが従う者たちにのみ許される。もし弱い者が立ち向かおうものなら、悪霊たちは、自分たちの支配下にある者が、かえって自分たちに逆らうなどとして、その者を嘲笑するだろう。また、悪霊たちを禁じること、彼らに対する権威を持つ偉大な人々の業である。 大天使ミカエルのように、墮落する運命にあったからこそこれを行った聖人のうち、悪魔を制止した者は果たしてどれほどいただろうか。私たちのような弱き者には、イエスの御名にすがることしか残されていない」[9]。

聖ヨハネ・預言者は、悪霊に取りつかれた者のために祈ってほしいという願いに対し、次のように答えた。「彼自身も、できる限り断食し、祈るべきである。そうすれば、彼のために祈る者たちの祈りも聞き入れられるだろう。なぜなら、『義人の熱心な祈りは大きな力を持つ』（ヤコブ5:16）であり、主は『この種は、祈りと断食によってのみ追い出される』と仰せられた」[10]。

聖イサアク・シリンは、悪霊に対する反論について次のように述べている。「あなたは、すでに六千年の歴史を持つ者たちを教えようとしているのだ。しかし、この（あなたの傲慢な反論）は、

彼らにとって、あなたのあらゆる知恵や分別にもかかわらず、あなたを打ち倒すための武器となるのである」[11]。

ブルガリアの至福のテオフィラクト：「悪霊から解放された者も、改心しなければ、その後さらに悪くなる」[12]。

イグナティウス（ブリャンチャニノフ）司教：「神の御心によりサタンに引き渡された、苦しむD.を、あなたがたの祈りの中で記念し、彼女の魂が救われるように…… 霊的な観点から言えば、このような神の懲罰は決してその人に対する悪い証しではない。多くの偉大な神の聖徒たちも、サタンに引き渡されるという試練にさらされてきたのだ……悪霊に取り憑かれることよりも、魂を永遠に滅ぼしかねない敵対的な思いを受け入れることの方が、はるかに重大である」[13]。

引用された聖人たちの言葉は、わが民族にとって極めて重大な問題である「悪霊に取りつかれた者の治療」に対する彼らの姿勢を雄弁に物語っている。

悪霊祓いは、現在、異教徒の西側世界全体に広く普及している、いわゆるペンテコステ派、クリスマ主義、「ニューエイジ」運動、そして世俗的な環境におけるいわゆる超能力といったものと同じ霊的秩序に属する現象である。これらすべてが、人々の魂と肉体を傷つけている。

カルトに対する魔術的な捉え方は、キリスト教の退廃や歪曲の主な原因の一つであり、異教、とりわけ無神論、オカルティズム、サタニズムの台頭の要因となっている。

## エクソシズムに関する記事の脚注。

1. 聖ヨハネ・カッシアン・ローマ人。『著作集』。モスクワ、1892年。445頁。
2. これに関する詳細：ウスペンスキー・N.D.「ヒザンチン典礼」//『神学論集』第21集、31頁。
3. 聖イグナティウス・ブリャンチャニノフは、グリゴリイ・シナイテ（14世紀）について次のように記している。「彼は、自分の時代には恵まれた人々が全くいない、それほどまでに彼らは稀になってしまったと断言した……ましてや現代においては、祈りを捧げる者は最大の注意を払わなければならない。私たちには、神に靈感を受けた導き手などいないのだ！」（イグナティウス（ブリアンチャニノフ）司教。『著作集』。サンクトペテルブルク、1905年。第1巻、274頁）。
4. 同上。72頁。
5. この例は数多く挙げることができる。その一つは、『オブティンスキーの聖イラリオン修道士伝』（ヴヴェデンスカヤ・オブティナ修道院刊、1993年、190頁）を参照のこと。
6. 『ラヴサイク』。モスクワ、1992年。126-127頁。
7. 聖ヨハネ・カッシアン・ローマ人。前掲書。440頁。
8. 聖ヴァルサヌフィオス大聖人および聖ヨハネによる、弟子たちの質問への回答を通じた霊的生活への指針。ディヴェエヴォ、1994年。263頁。質問381。
9. 同上。223頁。質問301。
10. 同上。416頁。質問673。
11. 聖イサアク・シリン。『修道者の言葉』。モスクワ、1993年。137頁。第30説教。
12. 福者テオフィラクト・ブルガリア人。『マタイによる福音書』12章43-45節の解説。
13. 聖イグナティウス（ブリャンチャニノフ）。『書簡集』。モスクワ、1995年。217-218頁。

---

宣教リーフレット 062

編集者：アレクサンドル（ミレアント）司教